



蒸す女

橋本昂祈

「パイはこぶりやけどエロい身体してはるな」

くびれに手が回る。自分の身体にローションを塗りつけて、泡まみれの夏美を抱きしめた。

「あぁん」

夏美の声が風呂場に響く。男は夏美の顔を撫でながら陰部に手を伸ばした。

「なぁ。諭吉3枚出すから本番やらせてくれ」

男がお尻を撫でながらいう。

「…だーめっ」

甘い声で夏美がいう。

「いいやんか。5枚だすわ!」

男の欲望は頂点に達していく。

夏美は男にフレンチキスをして

「めっ」

大量のオイルを竿に垂らして手で擦る。

「ヤバっ。イってしまう…」

男は一度目の射精をした。

「ツンデレ感がたまらん…。ベッド行こか」

夏美はシャワーで男の身体を洗う。

男が風呂場から出ていくと夏美はため息をついた。

「キモいんだよ。オッさん」

言って夏美はボーチからハーブ煙草を取り出した。火をつけるとき背中 of 観音菩薩がわずかに熱を持った気がする。白い煙が風呂場の天井にまとわりつき、細い廊下の幻がそこに伸びていく。

— 仕事はちゃんとやれ。

声が聴こえた。

いや、音ではない。背中 of 皮の下で誰かが口を開いたような感覚だけが、夏美の耳の奥に届いた。

主は誰なのかはわからない。

夏美には、それがあの家のトイレに戻れと言っているのか、それとも、ここから足を洗えという意味なのか、判断がつかなかった。

1

1

蒲田のカプセルホテルの天井は朝になっても夜みたいだった。スマホのバイブ音で夏美は目覚めた。背中の観音菩薩がシーツに張りつく感覚があった。上半身を起こしてTシャツを脱ぐ。紫色のリュックから冷たいウェットシートを取り出して身体を拭いた。

ここに泊まるのは五回目だ。

はじめてここに泊まったのは川崎の部屋まで帰る終電を逃した夜だった。ラブホテルに泊まろうとしたが、どこのホテルも満室だった。仕方なくカプセルホテルに泊まることにしたのだ。

シャワーも浴びれないホテルには意味がない。はじめはそう思っていた。だが、夏美はカプセルホテルが気に入った。ベッドに入る時、宇宙船の中に乗り込むような感覚があった。特に、2段ベッドの下が好きだ。見知らぬ他人が上に寝ていると思うと、それだけでワクワクする。誰かに組み敷かれていると思うと、胸の奥が少しざわつく。そんな願望が自分にあるのかもしれない。もしくは、母親のお腹の中にいるような感覚だったかもしれない。

睡眠薬抜きでスヤスヤと寝てしまった夜のことを、夏美はうまく思い出せない。

デリヘルと倉庫作業を掛け持ちする夏美にとって、カプセルホテルに泊まることはたまの贅沢だ。それくらいのご褒美はあって良いだろう。観音様も笑って許してくれるはずだ。

チェックアウトを済ませて外へ出た。夏の日差しが目にも染みる。夏美は目を細めた。アスファルトの蒸した薫りがした。ビルとビルの隙間から風が吹き前髪が乱れる。夏は嫌いだと夏美は思った。

夏美は京急蒲田から京急川崎へ向かった。社用バスに揺られること十五分で、通販会社の物流センターが並ぶ川沿いの倉庫街に着いた。そのうちのひとつが、夏美のバイト先だった。

近未来都市を連想させる大型倉庫の敷地内には、カフェテラスやコンビニ、仮眠室、シャワーブースなどが併設されている。

自動改札機のような受付では大量の人が出入りしていた。夏美は社用カードキーをかざし入場する。カフェテラスでは優雅にマックブックで仕事する人種がいて、夏美は怪訝な目でそれを見た。自分とは別の星の住民のように思えた。

ロッカー室では女子たちの黄色い声が飛び交っていた。その中に混ざる気にはなれなかった。夏美はカバンを預けると足早にロッカー室を出た。地下のトイレは夏美以外、誰一人としていなかった。彼女はズボンのサイドポケットから一欠片の菓子パンを取り出して食べた。昨夜の残りだった。甘さはほとんど抜けていて、口の中でただの粉みたいに崩れた。

地下1階から作業場の5階へ階段で向かう。夏美は会社のエレベーターはなるべく使いことにしてい

る。不倫や密会の温床だからだ。

5階までのぼりきると夏美の息はあがった。非常階段の脇で電子タバコを吸おうとした時だった。

—お礼参りは済んだのか？

夏美は後ろを振り返る。だが、誰も人はいない。（お礼参り？）夏美は過去に想いを馳せる。

「気に入らないなら今すぐ出てけ！」

夏美は父親の怒号に震えた。

言いたいことは山ほどあった。だが、夏美は言い返えさずに携帯電話と財布だけを持って家を出た。行き場所もなかったが、昔からの遊び仲間だけは話を聞いてくれた。地元、相模原の男友達鉄也がかくまってくれた。彼はヤクザの息子で中学校時代に番長を張っていた男だった。鉄也の部屋は離れになっていて悪さし放題だった。シンナーやスプレー缶にタバコの薰りが混ざりあった匂いがしていた。大人のおもちゃなども転がっていたし積みきれずに崩れたポルノ雑誌が床一面に散乱していて、ベッドとソファーくらいしか居場所がなかった。あの部屋で夏美は大切にしていたヴァージンを奪われた。その後は複数人にまわされた。

夏美は部屋を出るため裏バイトをはじめた。まだ未成年なのに身体を売っていたのだ。その頃の夢は、母親の実家の山梨に帰る予定だった。母の故郷で小さなパン屋さんを経営するのが夢だった。しかし、その夢は叶わなかった。母親はすでに死んでいたのだ。

2

2

川崎の古びた木造アパートには特別な荷物はなかった。あるのは母の三味線と遺影。綺麗に折り畳まれた衣類。ミニ冷蔵庫とケトルは友人の美寿紀からもらったものだ。

夜になると、薄い壁の向こうから隣人の笑い声が漏れてくる。たまにギターの音や女の喘ぎ声も聞こえる。でも、今日はお礼参りする番だ。彼氏のトラオが部屋に遊びに来る日だ。今夜のために仕事と副業を頑張ってきた。

夏美は畳の上に百均のビニールテーブルクロスを敷き、その上にオリオンビールの缶を三本並べた。冷蔵庫の中身は昨日スーパーで半額になっていたポテトサラダと業務用の唐揚げだけだ。

それでも、テーブルに並べてみると、少しだけ居酒屋みたいに見えた。母の遺影の前には、ミニチュアサイズのオリオンを一本置いてある。コンビニで見つけた限定缶だ。

「観音様、今夜だけは見逃してよね」

独り言みたいに呟いて、背中を少し丸める。シャワー帰りの湿ったタオルで髪をざっと拭きながら、鏡代わりのスマホのインカメラを覗き込んだ。

アイラインを引き直すか迷った末に、指先で目尻をこすって誤魔化す。仕事用の濃いメイクを少し削っただけで、顔つきが別人みたいに見えた。

トラオは時間どおりには来ない。そういう男だ。

約束の二十分前になると、階段をのぼってくる足音が聞こえるたびに、夏美は息を止めた。違う部屋の住人が通り過ぎるたび、オリオンの缶を指でトントンと叩いて、気持ちを落ち着けた。

やがて、木造アパート全体が小さく揺れるような重い足音が近づいてくる。

三味線の横に立てかけていた折り畳み傘が、かすかにカタリと鳴った。

「おーい、夏美ー。開けてくれよ」

トラオの声は、相変わらず間の抜けた明るさをまとっていた。

引き戸から少しだけ開けると、湿った夏の空気といっしょに、安い柔軟剤の匂いが入り込んでくる。

「遅い。ビール、ぬるくなると美味しくないんだけど」

口では文句を言いながらも、夏美は笑ってしまふ。トラオは手ぶらだった。コンビニ袋ひとつ持っていない。代わりに、薄いTシャツの襟元から覗くタトゥーのインクと片方だけ穴の開いたスニーカーが彼の生活を全部説明していた。

「ほら、見ろよ。今日、現場上がりでさ。日当一万だぜ。夏美のオリオン代くらいにはなるだろ？」

トラオは少し誇らしげに財布を取り出し中身の薄さをあえて見せつけた。夏美はそれを見て胸の奥が少しだけ楽になる。自分だけがどこか汚い場所で働いているわけじゃないと思えるからだ。

背中の観音菩薩は、今日は静かだった。

むしろ、アパート全体が蒸し風呂みたいに熱を溜めているせいでタトゥーの熱か夏のせいなのか境目目が曖昧になっていた。

「ほら、座って。オリオン冷やしといたから」

夏美はトラオの向かいに座り、缶のプルタブを開ける音を一つずつ確かめた。

シュツという小さな音のあと泡が少しだけ溢れる。その白さを見ると、どこか遠くの海を想像する。母の故郷の山梨には海なんてないのに。

「お袋はオリオンビールが大好きだった」

トラオがぼそりいう。

「へえ。缶のやつ？ それとも、瓶？」

「どっちでもいいさ。冷えてりゃ天国だって言ってた。誰だって故郷は恋しいだろ」

「トラオのお母さんって沖繩なんだ？」

「そうよ。オリオンの泡見ると、那覇の空気までいっしょに上がってくるってさ」

「トラオは沖繩になんかい行った？」

「数えるくらいじゃないよ。夏美は？」

「言ってトラオは唐揚げに手を伸ばす。」

「私はまだ行ったことない。ねえ、沖繩の海って綺麗なんでしょ？」

「ああ。世界一の海さ。いつか夏美にみせてやりたいな」

トラオはオリオンビール片手に遠い目をした。夏美は立ち上がりトラオの横に座りなおす。

「ねえ。今夜はいいでしょ？」

トラオは夏美を押し倒す。そして、ディープキスをした。夏美の胸を揉みしだく。夏美はわざと大きな声をあげた。（お礼参り）はじまりの合図だった。

3

3

土曜日の早朝、夏美はふいに目を覚ました。胸の奥がざわつくような気配に気づき横に手を伸ばす。さっきまで一緒に眠っていたはずのトラオの姿はもうどこにもなかった。

テーブルには一言だけ【オレたち別れよう】と手紙が置かれていた。夏美は涙を堪える。

夏美はコンビニへ向かう。6本入りのチョコチップスティックパンとカフェラテを買った。道すがら猫がノロノロと現れた。夏美は無類の猫好きだ。パンを一本ちぎって猫にやった。

アパートの外階段を上り鍵の開いたままのドアを開ける。6畳の部屋は昨日と何も変わっていない。ただ玄関のたたきにいつも転がっていた、かかとの潰れたトラオのスニーカーだけが綺麗に消えていた。

カフェラテのストローを噛み潰しながら「あ、ほんとにいなくなったんだ」と声に出してみた。

その瞬間、背中の観音菩薩がじわりと嫌な熱を持った。

――南に向かえ

慰めでもない冷たい声が響く。夏美は残りのスティックパンをテーブルに放り投げた。「うるせー。黙ってろ」

夏美はいう。この声の主はいったい誰なのか。精神病にかかったのだろうか。わからないが、確かに今日は南に向かう日だった。夏美は運命を呪った。

シャワーを浴びて適当な服をリュックに詰め込む。川崎のアパートには未練も何もない。大家に連絡する義理もない。ただ、トラオの柔軟剤の匂いがあるこの部屋に、これ以上一秒でも長くいたくなかった。京浜東北線に乗り込み、南へ向かう。

窓の外を流れる工業地帯の鈍い鉄色を眺めながら、夏美はリップを塗り直した。

横浜駅に降り立つと、空気が変わった。

川崎の湿ったドブの匂いとは違う、潮風と強い香水が混ざったようなギリギリした匂い。土曜の昼下がりの西口は、幸せそうなカップルや家族連れで溢れかえっている。

夏美は人ごみをかき分けながら、スマホで「横浜 風俗体入」と検索窓に打ち込んだ。

背中の観音菩薩は、もう何も言わない。ただ、夏の横浜の強い日差しを受けて、じりじりと鈍い熱を放ち続けていた。

マンスリーマンションに到着した。

西口の喧騒から少し離れた、古い雑居ビルの五階。あらかじめネットで手配しておいた暗証番号を打ち込み、重い鉄のドアを開ける。

部屋は無機質で、前に住んでいた誰かの安っぽい芳香剤の匂いだけが微かに残っていた。ベッドと小さなテーブル、必要最低限の家電。荷物をリュックから出す気にもなれず、夏美はそのままベッドに仰向けに倒れ込んだ。

天井のシミをぼんやりと見つめながら、トラオの手紙を思い出す。

【オレたち別れよう】

馬鹿な男だ。どうせ今日、あたしはこの横浜の部屋に移る予定だった。それを知っていたくせに、最後にお別れのキスでもするような気の利いた真似もできず、逃げるように消えたのだ。

「ほんと、ダサイ」

夏美は独り言をこぼしスマホの画面をタップした。感傷に浸っている暇はない。マンスリーの初期費用で手元の金はほとんど飛んでいる。今日から稼がなければ、この無機質な部屋にすらいらなくなる。

検索して見つけた「即日体入可」の風俗店に電話をかけると、気怠そうな男の声が「今から面接来れる？」と言った。

二時間後、夏美は関内駅近くの古びたビルの一室にいた。

「年齢は？ 経験は川崎だけ？ まあ、見た目悪くないし、とりあえず今日から入ってみる？」

面接官の男は履歴書にろくに目も通さず事務的にシステムを説明すると、夏美を待機部屋へと案内した。待機部屋のドアを開けると、むせ返るようなタバコと香水の匂いが押し寄せてきた。

薄暗い部屋のソファには数人の女たちがスマホをいじったり、死んだような目でテレビを眺めたりしている。川崎の待機所と空気は似ているが、どこかピリピリとした人を値踏みするような視線が夏美に突き刺さる。

「新人の子？　ここ、座りなよ」

奥のソファから声がした。見ると、派手なブロンドの巻き髪にブランド物のワンピースを着崩した女が細いタバコを吹かしながらこちらを見ている。他の女たちが明らかにその女に気を使っているのが空気でわかった。

「私、美晴（ミハル）。あんた、名前は？」

「……夏美です」

「ふーん。川崎から流れてきたんだって？　まあ、こっちの客はうるさいのが多いから、気をつけることね」

美晴はそう言って、赤いルーージュを引いた唇でふっと煙を吐き出した。その瞳は、新人の夏美を歓迎しているというより、どこか品定めするように冷たく光っていた。

夏美は小さく会釈をして少し離れたパイプ椅子に腰を下ろした。

背中の観音菩薩は沈黙したままだ。ここが新しい戦場になる。トラオのいない、ガラガラとした横浜の夜がこうして幕を開けた。

4

4

一時間ほど経った頃、背後の壁にかかった呼び出しランプが一つ点いた。

「夏美ちゃん、初回いける？」

カウンター越しにスタッフの男が顔だけ出す。

「はい」

短く返事をして立ち上がると、待機室の視線が一斉に夏美に集まる。

美晴はソファにふんぞり返りながら脚を組み替えただけで何も言わない。だが、その目だけがじっと夏美の背中を追いかけていた。

廊下は妙に冷房が効きすぎていて、足元だけが冷たい。

「出先はね、関内のビジホ。リピ客だから、そんなにややこしい奴じゃないよ」
スタッフはそう言って、封筒とルームナンバーが書かれたメモを渡してきた。

「本番は絶対ナシ。店飛びもナシ。トラブルになったら即電話。わかった？」

「はいはい」

夏美は適当に相槌を打った。川崎で散々言われてきた文句と同じだ。

ただ一つ違うのは、この店の男たちの瞳の奥に、どこか「計算」が見えることだった。ビジネスホテルの部屋番号は705号室だった。

エレベーターの中に淡い鏡があり夏美はそこでリップを塗り直した。背中の観音菩薩はさっきからずっと沈黙している。

「仕事は仕事」

自分にそう言い聞かせて、ノックを二回した。

ドアを開けたのは、四十代半ばくらいのスリ姿の男だった。

ネクタイを緩めてはいるが、まだ仕事の匂いをまとっている。

「おお、写真よりエロいね」

男は口角を上げて、顔だけで舐めるように夏美を見た。

「はじめまして」

形式的にそう言って部屋に入る。エアコンの効きすぎた空気とコンビニ惣菜の温い匂いが混ざって鼻についた。

一通りの流れはいつもと同じだった。

シャワー、軽い会話、ローション、喘ぎ声。

男は「川崎の子か?」「背中のタトゥー、痛かったろ」などと、どこか距離を測るような質問をしてきた。

夏美は、相手の求める返答を、ほとんど無意識に選んで返していく。

そうやっていけば、時間は勝手に過ぎる。

それが、これまで身につけた「仕事の呼吸」だった。

「なあ」

二度目の射精が近づいた頃、男が突然声を低くした。

「さっき店から電話あったんだわ」

「へえ」

夏美はあえて興味のなさそうな声を出した。男の手はさっきからコンドームの袋をいじっている。

「本番、オプションでオッケーってよ。店長がそう言ってた」

「そんなわけないでしょ」

夏美は一瞬、手を止めた。

男の目は本気だった。

「追加で3万払う。ちゃんと店にもバック入るって話だ。だから、いいだろ?」

「嘘だよ」

言いながら背中がじわりと熱くなる。

観音菩薩がゆっくりと目を覚ますような感覚があった。

「仕事はちゃんとやれ。さっき、風呂場で聞いた声がフラッシュバックする。」

「ちゃんと」の意味は誰が決めるのか。

店か、客か、自分か、それともこの背中の誰かか。

「ごめん。店のルールだから」

夏美は、男の指からコンドームの袋をすりと取り上げた。

「本番ナシ。どうしてもっていうなら、延長はしてもいいけど」

男の顔が、みるみるうちに赤くなった。

「ふざけんなよ」

「ふざけてない。そういう店だから」

「さっき、電話あったって言っただろ？ 店長がオッケーだって言ったんだよ」

「名前は？」

「は？」

「その店長の名前。誰？」

男は一瞬、言葉に詰まった。

たしかめるまでもない。

この手の「店長の許可」は、大抵、客の頭の中にしかない。

夏美はひと呼吸置いてからベッドを降りた。

「ごめん。これ以上やるなら、店に連絡するから」

そう言ってバッグからスマホを取り出すと、男の目が変わった。

「お前、客逃がしたらどうなのか知ってんのか？」

声のトーンが、急に低くなる。

ベッド脇の照明が、男の顔半分を陰にした。

「指名飛ばしは罰金だろ？ 出禁だろ？ 新人が何イキってんだよ」

男は立ち上がり夏美の手首を掴んだ。

力の入れ方がさっきまでの粘ついた優しさと違う。

「なあ。もう一回、考え直せよ」

指が骨に食い込む。背中の観音菩薩が焼きこてみたいに熱くなった。

――南に向かえ。

なぜ今、それなのか。脳裏に、川崎の木造アパートの天井と、あの狭い廊下が浮かぶ。お礼参りの夜、わざと大きな声を上げた自分。そのあと、トラオの体温が確かにそこにあったこと。

「……離して」

夏美は静かに言った。

男は笑った。

「お前みたいな仕事してるくせに、何を今さら清純ぶってんだよ」

「清純じゃないよ」

夏美は、男の手首を逆に掴み返した。

「でも、ルールは守る。そうじゃないと、全部ぐちゃぐちゃになるから」

言い終わらないうちに、男が力任せに引き寄せてきた。

バランスを崩して壁に肩をぶつける。

スマホがベッドの上に転がった。

画面が呼び出し番号の途中で止まったまま薄く光っている。

次の瞬間、部屋のドアが勢いよく開いた。

「失礼します」

聞き慣れない女の声が響く。

フロントのクレームかと思った男が振り向くと、そこには見覚えのあるブロンドが立っていた。

細いタバコの匂いが、冷えた空気に混ざる。

「何してんの、あんた」

美晴だった。

「店から電話来たわよ。新人の子からコール入ったけど様子がおかしいって。……で、本番強要？」

彼女は部屋の中を一瞥し、裸同然の男と肩で息をする夏美を見比べた。

「店長も暇じゃないからさ。こういうの、私のところに回ってくるわけ」

笑っているのに、目がまったく笑っていなかった。

男は口ごもる。

「いや、その……」

「帰りなよ」

美晴は短く言った。

「コールセンターにも記録残ってるし、これ以上ゴネるなら、あんたの会社に領収書送ればいいだけだから」

「脅しかよ」

男が吐き捨てる。

「ビジネスって言って」

美晴はさらりと言って、ベッドに転がったコンドームの袋をつま先で蹴った。

「ほら、新人ちゃん。着替えて。帰るよ」

夏美はふるえる指でバスタオルを巻き直した。

背中の観音菩薩はさっきまでの熱を少しだけ鎮めている。

「ありがとうございます」

頭を下げると美晴は肩をすくめた。

「勘違いしないで。あんたが飛んだらウチの店の評価が下がるだけ。横浜って街は女の代わりなんていくらでもいるけど、トラブルの噂だけはあつという間に広がるから」

「……はい」

エレベーターに乗り込むと、美晴はタバコに火をつけた。

「それにしても」

紫煙の向こうで彼女はちらりと夏美の背中を見た。

「その観音様、よく喋るね」

夏美の心臓が一瞬止まった気がした。

「……聞こえるんですか？」

「さあ。私には、あなたの顔がそう言ってるように見えただけ」

美晴は笑った。

エレベーターが一階に着く頃には、その笑い声はもう消えていた。

5

5

事務所に戻ると、店長の不機嫌なため息が煙草の煙と一緒に吐き出された。

「あーあ。あの客、そこそこの太客だったんだけどな。新人ちゃん、初日からやってくれたね」

パイプ椅子にふんぞり返る店長は、夏美の顔を見ようとしめない。デスクの上には、先ほどのビジネスホテルの伝票が投げ出されていた。

「すいません」

夏美が短く頭を下げると、横のソファでスマホをいじっていた美晴が鼻で笑った。

「店長、あのオッサン出禁にして正解だよ。最近、他の女の子にも本番強要して泣かせてたって噂じゃん。ウチの店、そういうの安く引き受ける三流だと思われたら困るんだけど」

「わかってるよ。でもなあ、今月の売上がさ……」

「売上なら私が今夜、一本多く飛ばせば済む話でしょ」

美晴が冷たく言い放つと、店長はそれ以上口答えできなくなった。どうやらこの店は、店長よりも美晴のほうが実質的な力を持っているらしい。川崎の小さなデリヘルでは見たことのない力関係だった。

「夏美ちゃん、今日はもう上がりでいいよ。初日で疲れたっしょ」

店長が投げやりな手つきで、日払いの茶封筒をデスクに置いた。

「……お疲れ様でした」

封筒を受け取り、事務所を出ようとした夏美の背中に、美晴の声が飛んできた。

「あなた、明日も入るの？」

「はい。稼がないといけないので」

振り返らずに答えると、「ふーん」とだけ微かな声が返ってきた。

深夜の横浜の街は川崎のそれよりもはるかにネオンが眩しくそして冷たかった。

酔客の笑い声や客引きの男たちの声をすり抜け夏美は西口の雑居ビルへと歩を進める。

マンスリーマンションの重い鉄のドアを開けると、生ぬるい空気が頬を撫でた。他人の匂いが染み付いた無機質な部屋。ベッドの上に放り投げた紫色のリュックだけがここにある唯一の自分の居場所だった。シャワーを浴びて湿った髪のままベッドに倒れ込む。

スマホの画面を開いてもトラオからの着信はおろかメッセージ一つ入っていない。

「ほんとに、終わったんだな」

夏美は天井のシミを見つめながら小さく呟いた。

悲しいというより、みぞおちのあたりにぼっかりと穴が空いたような感覚だった。あの川崎の蒸し暑い部屋でオリオンビールを並べてトラオを待っていた自分はもうどこにもいない。

背中の観音菩薩はすっかり鳴りを潜めていた。

窓の外からは遠くでパトカーのサイレンが鳴り響いていた。横浜の夜はまだ始まったばかりだ。

翌日の午後。

遅い時間に目を覚ました夏美は近くのコンビニで買ったアイスコーヒーを飲みながら、これからの算段を立てていた。手元にあるのは昨日の日払い分だけ。生活を安定させるにはもっと効率よく稼ぐ必要がある。

そんなことを考えていると、スマホが不意に震えた。画面には見知らぬ番号。

『今日の夕方、関内の喫茶店に来れる？ 美晴』

ショートメッセージだった。なぜ彼女が自分の番号を知っているのか疑問だったが、店長から聞いたのだろう。

断る理由も、断る勇気もなかった。

指定されたのは馬車道にあるレトロな純喫茶だった。

カランとドアベルを鳴らして中に入る。ベルベットのソファ席で美晴がアイ스티ーのストローを弄っていた。昨夜の派手なドレス姿とは違い、シンプルな黒いワンピースにサングラスを頭に乘せている。それでも放つオーラは隠しきれしていない。

「座りなよ」

美晴は顎で向かいの席をしゃくった。

「……なんの用ですか？」

夏美が警戒しながら座る。美晴はフツと笑った。

「あんた、稼きたいんでしょ？ あのお店じゃ、せいぜい月に数十万が限界よ。もっと割のいい仕事、紹介してあげようかと思って」

「割のいい仕事？」

「キャバクラよ。私の知り合いがやってる店。あんたみたいな『腹くくってる目』をした子、あそこの黒服が探してんの」

夏美は息を呑んだ。川崎のアパートを出る時に検索していた「横浜キャバクラ」の文字が頭をよぎる。
「どうして私に？」

「さあね。強いて言うなら、あんたの背中の観音様が気に入ったから、かな」

美晴がアイスティーの氷をカランと鳴らした時、店の奥から一人の男が歩いてきた。ホスト風のスリムなスーツを着こなした、蛇のように鋭い目つきの男。

「お待たせ、美晴。この子が例の新人？」

「そうよ、タツヒコ。どう？ 磨けば光りそうでしょ」

夏美の背中が、再びじわりと熱を持ち始めた。

6

6

男は夏美の正面に立つ。まるで品物を値踏みするように全身をゆっくりとなぞるように見た。

黒いシャツの襟元は二つほど開けられ細い銀のネックレスが喉元で光っている。髪は無造作風に整えられているが、どこかホストクラブの匂いがした。

「座っていい？」

タツヒコは確認というより宣言のように言って、夏美の隣の席に腰を下ろした。

微かに香水と煙草を我慢した後のような乾いた匂いがした。

「今村夏美さん、ね」

彼はそう言いながら、テーブルに置いた指先で「今村」の「今」の字をなぞるふりをする。

「今、か。いい名前だな。今を売って明日を繋ぐ仕事してそうな顔してる」

「……褒めてます？」

夏美が眉をひそめる。タツヒコは口角だけで笑った。

「どっちだと思う？」

その一瞬の沈黙のあと彼の視線はすると夏美の肩口から背中側へ滑っていった。

「でさ」

氷の溶ける音に紛れるような声でタツヒコは言った。

「背中、見せてよ」

「は？」

反射的に声が少しだけ大きくなった。

喫茶店の奥の席にいたカップルがこちらを一度だけ振り向いて、すぐに興味を失ったふりをした。

「観音菩薩、入ってるんでしょ？」

タツヒコの目が、初めて本気の色を帯びた。

「あの店の黒服から聞いたよ。川崎から流れてきた拝み屋の女がいるって」

「ここ、喫茶店ですよ」

夏美はわざと呆れたように言った。

「背中見せるなら、せめて個室かラブホでどうぞ。そういう趣味なら他当たってください」

美晴が噴き出しそうになるのをストローを囁んでこらえている。

タツヒコは笑わなかった。

代わりに、テーブルの下で指をトントンと一定のリズムで鳴らしながら低い声で続けた。

「別に、エロい意味じゃないよ。商売の話だ。この街で背中に神様背負ってる女ってのは、それだけでブランドになる。しかもあんた顔にまだ諦めてないって書いてあるし」

「諦めてない？」

「そう。全部投げて完全に壊れた女の見じゃない。まだ、どこかで帳尻合わせようとしてる顔だ。そういう女に神様の入れ物がくっついてるなら……ね？」

「ね？ って何」

夏美はアイスコーヒーの水をストローで突きながらタツヒコを睨んだ。

背中の観音菩薩が椅子越しのビニールレザーにじんわりと張り付いていく感覚がある。

（仕事はちゃんとやれ）

あの声がふと耳の奥で揺れた気がした。

「ひとつ、テストしよ」

タツヒコが言った。

「今日の夜、うちの店に顔出せよ。席に座って客の隣で一時間だけ女優やってみせて。背中の観音様は、そのとき見せてもらう」

「なんでそんなに、背中、背中って」

「簡単だよ」

タツヒコは、ようやく少し笑った。

「タトゥーにはストリーがくっついてる。ストリーのある女は、高く売れる。あんたの観音様がどんな話を連れてるのか、早めに知っておきたいだけ」

美晴が横から口を挟んだ。

「タツヒコはね、客よりも先に女を鑑定するのが趣味なの。財布より先に傷を見る男っていうか」

「悪趣味」

夏美はうんざりしたように言った。

「でも、悪趣味な男に救われる夜もあるわよ」

美晴が意味ありげに笑う。

タツヒコは立ち上がった。

会計はすでに済ませてあったらしく、ポケットから取り出したレシートをくしゃりと握りつぶす。

「今日の二十二時。店の場所、美晴から送らせる。来るか来ないかは、観音様と相談して決めな」その言葉を残して、タツヒコは喫茶店を出ていった。

開いたドアから夏の蒸した空気が一瞬入り込み、すぐに冷房に飲み込まれた。

「どうする？」

二人きりになったテーブルで美晴が尋ねる。

「行かなかったら？」

「たぶん、別の誰かが背中の中の女になるだけ。横浜って街はそういうのに困ってないから」

夏美は、残った氷を口に含んだ。

冷たさが舌の上でじわじわと溶ける。

背中の中の観音菩薩は、何も言わない。ただ、皮膚の下で、ゆっくりと息をしているような気配だけがあった。

「……二十二時ね」

夏美は呟いた。

「観音様がどう言うか、今夜聞いてみる」

7

7

二十二時。美晴から送られてきた住所は、関内のメインストリートから一本裏に入った高級キャバクラだった。

重厚なマホガニーの扉を開ける。川崎の待機所とは別次元の静かで冷やかな空気が漂っていた。クリスタルのシャンデリア、深いワインレッドの絨毯。ピアノの生演奏がグラスの触れ合う音を上品に包み込んでいる。

ボーイに案内された更衣室で夏美は用意されていた黒いドレスに着替えた。背中が大きく開いたデザインだったが、タツヒコの指示なのか、上から薄いシルクのショールを羽織るように言われた。

「来たね」

廊下に出ると、壁に寄りかかっていたタツヒコが声をかけてきた。スーツ姿の彼は、昼間よりもずっと水商売の男らしい鋭さをまといっている。

「テストの相手はVIPルームにいる。名前は伏せるが、この街の『裏のルール』を作ってるようなお偉いさんだ。粗相すれば、俺もろとも東京湾に沈むかもな」

タツヒコは冗談めかして言ったが、目は少しも笑っていないかった。

「で、私は何をすればいいの？」

「ただ座って、酒を作って、あんたの『顔』を見せてやればいい。あとは、タイミングを見てショールを外せ」

夏美は小さく息を吐き、タツヒコのあとに続いて重い扉をくぐった。

VIPルームは、タバコの煙すら計算されたように美しく漂っていた。

革張りのソファの奥に、初老の男が一人で座っていた。仕立てのいいスリーピースのスーツ。白髪を綺麗に撫でつけ、手元のロックグラスを静かに揺らしている。

成金のようなギラギラした装飾品は一切ない。だが、その男が発する絶対的な「静寂」が、逆に裏社会の濃い血の匂いを漂わせていた。

「失礼します」

タツヒコが恭しく頭を下げ、夏美を男の隣に座らせた。男は夏美をちらりと見ただけで、無言でグラスに口をつけた。

「新人か」

低く、よく通る声だった。

「はい。今日から入りました、夏美と申します」

夏美が水割りのグラスを作りながら言うと、男は少しだけ目を細めた。

「……川崎の匂いがするな」

ドクリと、夏美の心臓が跳ねた。

「わかりますか」

「わかるさ。どれだけ綺麗に着飾っても、水底を這いつくばってきた人間の目はごまかせない。お前は、何かから逃げてきた顔をしている」

男の目は、夏美の内臓まで見透かすように冷徹だった。

背中の観音菩薩が、じりじりと熱を持ち始める。川崎のアパートでトラオを待っていた夜とは違う、ひりつくような防衛本能の熱だ。

（試されている）

夏美は直感した。ここで視線を逸らせば、この男にとってはただの「つまらない女」になる。

「逃げてきたんじゃないやしません」

夏美は男の目を真っ直ぐに見返した。

「場所を変えただけです。どうせ、どこにいても同じ底辺なら、少しでも時給のいい地獄を選ぼうと思っただけですから」

男の手がピタリと止まった。

数秒の沈黙のあと、男の喉の奥から「ふっ」と低い笑い声が漏れた。

「いい度胸だ。時給のいい地獄、か」

男はソファに深く背中を預け、夏美の肩先を見た。

「少し暑いな。そのショール、外したらどうだ」

タツヒコが部屋の隅で、微かに顎を引いた。

夏美は躊躇することなく、肩からシルクのショールを滑り落とした。

黒いドレスの開いた背中から鮮やかな青と赤で彫られた観音菩薩の姿がVIPルームの薄暗い照明の中に浮かび上がる。

男の目が、大きく見開かれた。

ただのファッショントアターではない。業の深い人間が、祈りや呪いを込めて彫る本物の「紋紋」だ。「……なるほど。重いものを背負っているな」

男の指先が、夏美の背中 of 観音菩薩の輪郭を空中でなぞるように動いた。

その瞬間、背中 of 皮膚の下で、あの声ははっきりと響いた。

——高く売れ。

夏美は口角をわずかに上げ、不敵に笑ってみせた。

「重いですよ。でも、これくらい背負ってないとこの街じゃ生きていけないんですよ？」

男はついに声を上げて笑った。

「タツヒコ、面白い女を拾ったな」

「お気に召したようで何よりです」

タツヒコが満足げに頭を下げる。

夏美はグラスの水を揺らしながら、背中 of 熱がゆっくりと心地よい温度に変わっていくのを感じていた。横浜の夜の底へ、夏美は自らの足で、確かな一步を踏み下ろしていた。

8

8

店が終わった深夜の事務所。

重厚なマホガニーの扉の向こう側とは打って変わり、蛍光灯が白々と照らす殺風景な部屋で、タツヒコはデスクの上に分厚い茶封筒を無造作に放り投げた。

「合格だ。あの御大が、次も夏美をつけると言って帰ったよ」

封筒の口から帯のついた一万円札の束が覗いていた。

「これ……」

「前渡し金だ。ざっと百万。あんたの『観音様』への初穂料ってどこかな」

川崎のデリヘルで客の機嫌を取りながら何十回、何百回と身体を売ってようやく届く金額。それが、ただ一時間、服を着たまま横に座り、背中を見せただけで手に入った。

夏美は茶封筒に手を伸ばした。紙の束は想像していたよりもずっと重かった。

「それと、これもだ」

タツヒコはさらに、銀色の鍵をデスクに滑らせた。

「関内のマンションの鍵だ。あんなセキュリティの甘いマンスリーは今日で引き払え。ウチの看板背負う女が、いつまでも安宿暮らしじゃ箔が落ちる」

夏美が鍵を見つめていると、不意に背後から乾いた拍手の音が響いた。

「素晴らしいシンデレラストーリーね」

振り返ると、腕を組んだ美晴がドアの枠に寄りかかっていた。彼女の口元は笑っているが、目は酷く冷え切っている。

「初日から帯付きの札束に、高級マンションの鍵。タツヒコ、あんた私が連れてきた新人だってこと、忘れてないわよね？」

「もちろん感謝してるさ。紹介料は後で弾む」

タツヒコが平然と返すと、美晴は「ふん」と鼻を鳴らした。

「夏美」

美晴がまっすぐにこちらを見る。

「あんた、その金と鍵を受け取るってことは、この街の『鎖』に繋がれるってことだからね。川崎の底辺より、こっちの地獄の方がずっと息が詰まるわよ」

「……わかってます」

夏美は茶封筒と鍵をしっかりとリュックの奥に押し込んだ。

背中の観音菩薩は、今は静かだった。何も言わない。だが、その沈黙こそが、すでに後戻りできない契約書にハンコを押してしまった事実を突きつけているようだった。

夜明け前の横浜。

冷たい風が、火照った頬を撫でていく。

夏美は新しいマンションに向かうため、タクシー乗り場へと歩き出した。

ふと、交差点の向こう側に視線をやったときだった。

薄暗い街灯の下、片方だけかかとの潰れたスニーカーを履いた男の後ろ姿が見えた気がした。

「トラオ……？」

思わず足が止まる。

目を凝らしたが、そこにいたのはただの酔っ払った客引きの男だった。

気のせいだ。夏美は小さくかぶりを振り、目の前に停まったタクシーに乗り込んだ。

リュックの中の札束が、観音菩薩の代わりに、ドクン、ドクンと嫌な脈を打っている気がした。

関内のマンションは、川崎の木造アパートとは対極にあるような無機質で完璧な空間だった。大理石のエントランスを抜け、エレベーターで十階へ上がる。タツヒコから渡された銀色の鍵を差し込むと重いドアが音もなく開いた。

新築特有の接着剤と微かなオゾンの匂い。

夏美は靴を脱ぐのもどかしく、リビングの白い本革ソファにリュックを放り投げた。

「……広いな」

誰もいない部屋で声に出してみる。防音性の高い壁のせいで、自分の声が妙に近くで響いた。

シャワーを浴び、備え付けの冷蔵庫にあったミネラルウォーターを飲み干す。リュックから百万の束を取り出し、ガラステーブルの上に置いた。

札束の帯を見つめていると、背中の観音菩薩がピリツと小さく痛んだ。

「わかってるよ。ただの紙切れだって」

夏美は自嘲気味に笑うと、そのままソファに倒れ込んで泥のように眠った。

それから数日が過ぎた。

夏美はタツヒコの店で「観音菩薩の女」として、瞬間にナンバー入りのホステスたちを脅かす存在になりつつあった。あの初老の男―『御大』と呼ばれる黒幕の指名が続いたことで、他の客も我先に夏美を指名し始めたのだ。

美晴の態度は日増しに冷たくなり、更衣室での視線は刃物のように尖っていた。だが、夏美は気にしなかった。横浜のルールは金と力だ。川崎の底辺で泥水をすすってきた彼女にとって、女同士の嫉妬など痛くも痒くもなかった。

しかし、過去はそう簡単に彼女を自由にはしてくれない。

その日の夕方、マンションのオートロックが不意に鳴った。

ベッドから起き上がり、インターホンのモニターを覗き込んだ夏美の全身から、すっと血の気が引いた。

画面に映っていたのは、宅配業者でも、タツヒコでもなかった。

よれよれのスーツを着た、首に太い傷跡のある角刈りの男。

川崎の裏社会でデリヘルを牛耳っていたヤクザの幹部、山倉だった。夏美が「お礼参り」と称してトラオを囮に使い、罠にかけたあの組織の人間だ。

『よお、夏美ちゃん。随分といい部屋に住んでるじゃねえか』

モニター越しのスピーカーから、スピリタスでうがいをしたようなざらついた声が響く。

夏美は息を殺した。なぜ、この場所がバレたのか。タツヒコの店に出入りしているところを見られたのか。

『居留守使っても無駄だぞ。お前がさっきコンビニから帰ってきたの、下から見てたからな』
山倉はモニターに向かって黄色い歯を剥き出しにして笑った。

『トラオの野郎がウチの金持ち逃げしてどこに消えたか……心当たり、あるよなあ？』

トラオが、組織の金を持ち逃げした？

夏美の頭の中で、バラバラだったピースが一瞬にして組み上がった。

あの日、トラオが現場仕事のふりをして見せびらかしてきた財布の中身。そして、翌朝の【オレたち別れよう】という手紙。

彼は夏美を捨てたのではない。夏美の「お礼参り」の騒ぎに乗じて組織の金を抜き、夏美を巻き込まないために、あるいは自分だけ助かるために、一人で逃亡したのだ。

『開けるよ、夏美ちゃん。川崎の落とし前、横浜でキツチリつけさせてもらうぜ』
背中を観音菩薩が、一気に焼け焦げるような熱を持った。

――逃げるな。

慰めでも警告でもないその声が、夏美の脳髓を直接揺らした。

10

10

「……逃げるな、か」

夏美は乾いた唇で呟くと、インターホンの通話ボタンを迷いなく押し込んだ。

「何の用ですか、山倉さん」

『やっと声出しやがったな。さっさと下へ降りてこい。それとも俺が上まで行こうか？』

画面の向こうで山倉が凄むが、夏美の胸の奥は妙に冷え切っていた。川崎の古アパートで震えていた頃の自分なら窓から飛び降りても逃げていただろう。だが、今は違う。背中を観音菩薩がそしてテールに積まれた百万の札束が、彼女に奇妙な万能感を与えていた。

「あんな男、どこで野垂れ死のうが私の知ったことじゃありません。別れを切り出されたのは私の方ですから」

『嘘をつけ！ お前らグルになってウチのシノギを……』

「大声出さないでくださいよ」

夏美は冷たく言い放った。

「ここ、関内の高級マンションですよ。エントランスで騒ぎを起こせば、すぐに警察が来ます。それに……」

夏美は一呼吸置き、一番効果的なカードを切った。

「私に指一本でも触れる気なら、タツヒコさんに、いや、『御大』に許可を取ってからにしてくださいね」

『御大……だと？』

モニター越しの山倉の顔が、あからさまに強張るのがわかった。

川崎のチンピラ紛いのヤクザでも、横浜の裏社会を牛耳る『御大』の噂くらいは耳にしているはずだ。

「川崎の泥水を啜ってた私とはもう違うの。帰ってください。これ以上つきまとうなら、東京湾に沈むのは山倉さん、あなたの方よ」

ブツツと通話を切った。

心臓が肋骨を突き破りそうなほど激しく鳴っている。膝から力が抜け、夏美はその場にへたり込んだ。ハッターだ。タツヒコも御大も、一介の新人キャバ嬢のトラブルのために、どこまで動いてくれるかわからない。

だが、モニターを再確認すると、山倉の姿はすでにエントランスから消えていた。

「……凄いだ」

息を深く吐き出したとき、床に放り投げたスマホが震え出した。

画面には『タツヒコ』の文字。

夏美は震える指でタップし、耳に当てた。

『よお。お前のマンションの下に、川崎のゴキブリが一匹うろついてたみたいだが』

「タツヒコさん……見てたんですか」

『俺の用意した部屋だぞ？ 防犯カメラの映像くらい、こっちに筒抜けに決まってるだろ』

タツヒコの乾いた笑い声が聞こえる。

『よくハッターかましたな。御大の名前まで出して。背中 of 神様がそう言えって囁いたか？』

「……ええ、まあ」

『いい度胸だ。だがな、夏美。川崎の連中は馬鹿だが、しつこいぞ。トラオって男が持ったまま消えた金、いくらか知ってるか？』

「知りません」

『三千万だ』

夏美は息を呑んだ。トラオが見せびらかしてきたあの日当の一万は、三千万の束から抜き取った端金だったのか。

『その額になると、御大の名前を出したところで簡単には引き下がない。横浜（こっち）の火種になる前に、ケリをつけるぞ。今すぐ店に来い』

電話が切れる。

背中の観音菩薩が、再びドクンと大きく脈打った。

横浜の深い夜が、さらに真っ黒な口を開けて夏美を待ち受けていた。

11

11

真夜中の高級キャバクラは、華やかな喧騒が嘘のように静まり返っていた。

VIPルームの重厚な扉を開けると、タツヒコが一人で革張りのソファに深く腰掛けていた。テーブルの上には、グラスの代わりに黒いファイルが置かれている。

「遅かったな。座れ」

タツヒコは顎で向かいの席をしゃくった。

夏美は無言で腰を下ろした。マンションからここまでタクシーで飛ばしてくる間、頭の中はトラオのことで一杯だった。

「状況は最悪だ」

タツヒコが低く通る声で口を開いた。

「川崎の山倉の組織は、ただのゴロツキの集まりじゃない。裏で関東の大きな組織と繋がってる。あいつらが血眼になって探してる三千万は、その上納金だったらしい」

「……そんな大金、トラオが一人ではどうにかできるはずがないわ」

「だが、そいつは現に持ち逃げした。お前の『お礼参り』の騒ぎに乗じて、組織の事務所の金庫からな」
タツヒコは黒いファイルを開き、中から一枚の写真をテーブルに滑らせた。

防犯カメラの不鮮明な画像。そこには、大きなボストンバッグを抱えて路地裏を走る男の後ろ姿が写っていた。片方だけ穴の開いた、かかとの潰れたスニーカー。間違いない。トラオだ。

「山倉は、お前が手引きしたと疑ってる」

タツヒコは煙草に火をつけ、紫煙を細く吐き出した。

「だが、あの御大が『この女はウチのシマの人間だ』と一言口利きしてくれたおかげで、川崎の連中は手を出せなくなった。とりあえず、お前の身の安全は保障されたわけだ。よかったな」

「……」

「だが、トラオはどうなる？ 御大の庇護はお前だけだ。山倉の連中がトラオを見つければ、三千万吐か

された挙句、東京湾の底にドラム缶詰めだ。……夏美、お前は どうしたい?」

タツヒコの目が、鋭く夏美を射抜いた。

「あの男がどうなろうと、私には関係ない。そう言ってしまうえば、この話は終わりだ。お前は横浜で、観音菩薩の女としてただ稼げばいい」

夏美はテーブルの写真を見つめた。

川崎のアパートで、オリオンビールを並べて待っていた夜。【オレたち別れよう】という手紙を残して消えた朝。裏切られた怒りはある。だが、それ以上に、あのしょうもない男が、自分の命と引き換えにしてまで何をしたかったのか、夏美にはそれがわからないのが許せなかった。

(いつか夏美にみせてやりたいな。世界一の海さ)

唐揚げを頬張りながら、遠い目をして沖繩の海を語っていたトラオの横顔が脳裏を掠める。

「タツヒコさん」

夏美は顔を上げ、タツヒコの目を真っ直ぐに見返した。

「トラオは、私が先に見つけます」

「……なんだと?」

タツヒコが眉をひそめる。

「川崎の連中に見つかる前に、私がいっつを見つげ出す。あいつが持ち逃げした三千万も、私が回収する」

「正気か? なぜそこまでする。あの男はお前を囚にして逃げたんだぞ」

「だからです」

夏美の声は、冷たく透き通っていた。

「あいつが本当に私を裏切ったのか、それとも別の理由があったのか。……あいつを殴って、自分の口から聞かないと、私は前に進めない。私の『お礼参り』は、まだ終わってないんです」

背中の観音菩薩が、皮膚の下でチリチリと熱を帯びる。

(仕事はちゃんとやれ)

あの日風呂場で聞いた声の意味が、今ならわかる気がした。この街で、誰かの庇護のもとで安全に生きるだけが「仕事」ではない。自分の手で落とし前をつけること。それこそが、彼女に課せられた「仕事」なのだ。

タツヒコはしばらく黙って夏美を見ていたが、やがて短く息を吐いた。

「……わかった。だが、期限は三日だ。それ以上は御大も川崎の連中を抑えきれない。もし見つけれなければ、お前もトラオと一緒に地獄へ落ちることになるぞ」

「三日で十分です」

夏美は立ち上がった。

「あいつの逃げそうな場所は、一つしか心当たりがありません」

横浜の街は、まだ深い闇の中だった。

夏美はスマホを取り出し、相模原の鉄也の番号をタップした。トラオが頼れるような裏社会に通じた昔の人間は、あの男しかいな

12

12

相模原の街は、川崎の湿気とも横浜の潮風とも違う、乾いた土の匂いがした。

夏美が鉄也のいるプレハブ小屋にたどり着いたのは、夜が白み始めた頃だった。かつて夏美が居場所を求めて転がり込み、そして心身をすり減らしたあの部屋は、相変わらずポルノ雑誌と空き缶が散乱し、シンナーと安煙草の匂いが染みついていた。

「よお、夏美。久しぶりだな」

スウェット姿の鉄也は、ソファに寝転がったまま気怠そうに手を上げた。昔はヤンキーの番長として威張っていた彼も、今はただのうらぶれた半グレにしか見えなかった。

「鉄也。トラオ、ここに来たでしょ？」

夏美は単刀直入に切り出した。

「あいつが川崎からトンスラして、お前を頼らないわけがない。三千万、どこに隠したの？」

鉄也はゆっくりと身を起こし、テーブルの上の灰皿に煙草を押し付けた。

「……お前、横浜でいいパトロン見つけたって噂だったけど、随分と鼻が利くようになったじゃねえか」

鉄也が薄ら笑いを浮かべる。

「ああ、来たよ。一週間前にな。ポストンバッグ抱えて、目え血走らせてよ。うちの親父のツテを使って、海外へ逃げる船を手配してくれて泣きついてきた」

「それで？ 船は手配したの？」

「バカ言え。川崎の山倉のオジキから『トラオって野郎が来たら即連絡しろ』ってお達しが回ってたんだぜ。俺がそんなヤバイ橋渡るわけねえだろ」

鉄也は立ち上がり、夏美に歩み寄った。

「あいつ、金庫から抜いた三千万丸ごと俺に預けて、船のチケット代だって言いやがった。だから俺は、その金だけ受け取って、あいつを倉庫に監禁した。……山倉のオジキに引き渡すためにな」

ドクン、と夏美の心臓が大きく跳ねた。

「トラオを、売ったの？」

「当たり前だろ。三千万は俺がネコババして、トラオの身柄だけオジキに渡せば、俺は二重でオイシイ思いができる。……はずだったんだがな」

鉄也の顔が、急に苦虫を噛み潰したように歪んだ。

「昨日、俺が倉庫の様子に行ったら、あいつ、縛ってたロープを自分の歯で噛みちぎって逃げやがった。血だらけのロープだけ残してな」

夏美は息を呑んだ。

トラオは金を持たずに逃げた。鉄也に騙され、川崎のヤクザに売られそうになりながら、自分の肉を裂いてまで逃げ延びたのだ。

「あいつ、金もねえのにどこへ逃げたんだよ」

鉄也が苛立たしげに壁を蹴り上げる。

「このままじゃ、オジキにトラオを引き渡せねえ。俺が三千万抜いたこともバレちまう。なあ、夏美。お前、あいつの女だったんだろ？ どこに隠れてるか心当たりねえのかよ」

鉄也が夏美の肩を掴もうと手を伸ばした。

その瞬間、夏美の背中の観音菩薩が、これまでで一番強い熱を放った。

（いつか夏美にみせてやりたいな）

トラオの言葉が、再び耳の奥で響く。

「……触らないで」

夏美は鉄也の手を冷たく振り払った。

「あんたみたいなクズに、あいつの居場所なんて教えない。三千万はあんたがどうにかしなよ。川崎のヤクザに殺される前にね」

言い残し、夏美はプレハブ小屋を背にした。

「おい、待てよ夏美！ お前も同罪だぞ！」

背後から鉄也の怒号が飛んできたが、振り返る気にはなれなかった。

空はすっかり白み、夏の暴力的な日差しが相模原のアスファルトを照らし始めていた。

夏美は確信していた。トラオがどこに向かったのか。

金も船もない彼が、血まみれになってまで向かう場所。それは、彼が唯一「天国」と呼んだ場所。

「……沖縄」

夏美は紫色のリュックを背負い直し、まっすぐに駅へと歩き出した。

タツヒコとの約束は三日。

観音菩薩の熱は、彼女に南へ飛ぶことを命じていた。

羽田从那覇へ向かう飛行機の中で、夏美は一睡もできなかった。

窓の下には分厚い雲海が広がり、時折その切れ間から見知らぬ島々が顔を出す。鉄也のプレハブに残されていたという血まみれのロープ。ネコババされた三千万。そして、背中の観音菩薩の鈍い熱。それらが頭の中で何度もループし、コーヒーの氷のように溶けては消えた。

タツヒコとの約束は三日。

今日が二日目だ。今日中にトラオの居場所の目星をつけ、明日には対面しなければならない。

『当機は間もなく、那覇空港に着陸いたします』

電子音のアナウンスが響き、機体が大きく降下を始めた。

那覇空港のボーディングブリッジに出た瞬間、空気が暴力的に変わった。

川崎のドブが混ざったような湿気とも、関内のネオンが焦げるような匂いとも違う。甘ったるく、それでいて海の塩気が肺の奥まで直接張り付いてくるような、まとりつく熱気。

「…これが、世界一の海？」

夏美は独り言をこぼしたが、その声は観光客たちの浮かれた喧騒と、子供の泣き声にかき消された。到着ロビーを抜けて外へ出ると、南国の容赦ない日差しが目突き刺さった。弱々しいヤシの木が風に揺れ、白いタクシーが列をなしている。

ふと、川崎のアパートでオリオンビールを並べて待っていた夜が蘇る。

（オリオンの泡見ると、那覇の空気でいっしょに上がってくるってさ）

トラオの間の抜けた笑い声が、すぐ耳元で聞こえた気がした。

背中の観音菩薩は、沈黙していた。

川崎のアパートを出る時に『南に向かえ』と命じたあの声は、今はもう聞こえない。まるで、夏美が自分の足でこの土地を踏みしめるのを、じっと値踏みしているかのようだった。

夏美は紫色のリュックを肩に掛け直し、タクシー乗り場へと歩き出した。

運転手に告げた行き先は、那覇市内の「松山」というエリア。

事前にスマホで調べた、那覇最大の歓楽街だ。金もツテもなく、血だらけで逃げ込んだ人間が、その日の飯と寝床を求めて潜り込む場所といえば、全国どこでも夜の街と相場が決まっている。

タクシーが国道58号線を走り出す。

窓の外には、抜けるような青空と、やけに白く巨大な雲が並んでいた。リゾートホテルやレンタカーの看板が通り過ぎていく。

「おねえさん、観光ね？」

日焼けした初老の運転手が、バックミラー越しに話しかけてきた。

「…人探しです」

夏美が短く答えると、運転手は「ああ」とだけ言って、それ以上は聞いてこなかった。

昼下がりの松山は、夜の喧騒が嘘のように死んだような静けさに包まれていた。

夏美は適当なビジネスホテルにリュックを預けると、強い日差しの中、街を歩き始めた。キャバクラやスナック、風俗店のけばけばしい看板が、昼の光の下ではどこか惨めに見えた。

聞き込みのやり方は、川崎で嫌というほど学んでいる。

「首に太い傷のある、ヤクザ上がりみたいな男、見ませんでした？」

夕方になり、灯りが点き始めた小さなスナックや客引きの男たちに、夏美はトラオの特徴を尋ねて回った。最初は「知らねえよ」と追い払われていたが、数千円の札を握らせると、次第に口を割る者が出始めた。「ああ、その男なら二日前にウチの店の前をうろついてたな。金持ってなさそうだったから追い返したけどよ」

「右手に包帯みたいな布をぐるぐる巻きにした奴か？ 松山の裏通りで、ホームレスみたいなジジイからタバコ恵んでもらってたぜ」

証言は少しずつ、だが確実に、トラオの足跡を形作っていく。

あいつは確かに、この那覇にいる。

夜の八時を回る頃、夏美は古びたコインランドリーの前で、一人の客引きから決定的な言葉を引き出した。

「その男、たぶん『泊（とまり）港』のほうに向かったはずだ。フェリーのチケット売り場に張り付いて、誰か金持ってそうな奴を探してるみたいだったからな。離島にでも逃げる気じゃねえか？」

泊港。

夏美はスマホで地図を開いた。ここから歩いて行ける距離だ。

明日は三日目。

（トラオ、あんた絶対に逃がさないから）

夏美はペットボトルの水を飲み干し、夜の那覇の街を北へと向かって歩き出した。

14

14

翌朝、三日目の太陽が那覇の街をじりじりと焼き始めている。

夏美は朝一番で泊港（とまりん）のフェリーターミナルに立っていた。巨大な白い建物の前には、離島へ向かう観光客やダイバーたちが列を作り、潮の匂いとエンジンの重低音が入り混じっている。

ここにトラオがいるはずだ。

夏美はチケット売り場や待合所のベンチ、裏手の搬入口まで、目を皿のようにして探し回った。だが、あの見慣れたよれよれのスーツも、かかとの潰れたスニーカーも見当たらない。

「すいません、昨日か一昨日、首に傷のある男を見ませんでしたか？」

港の売店のおばちゃんに声をかけたが、「さあねえ、毎日いろんな人が来るからねえ」と首を振られるだけだった。

焦りが胸の奥を引っ搔く。

タツヒコとの約束の時間は、今日の夜までだ。今日中に見つけて横浜に連絡を入れなければ、あの御大ですら川崎の連中を抑えきれなくなる。

夏美はターミナルを抜け、フェリーが停泊していない人気のない防波堤の方へと歩を進めた。強い海風が髪を激しく揺らす。

そこで、夏美の足がピタリと止まった。

防波堤の先端、立ち入り禁止の黄色いテープが張られたフェンスの向こう側。

二人の制服警官と、作業着姿の港湾関係者が何やら深刻な顔で話し込んでいる。その足元に、ブルーシートが乱雑に被せられた「何か」があった。

嫌な予感がした。

背中の観音菩薩が、氷水を流し込まれたように冷たく縮み上がる。

夏美は無意識のうちに、テープをくぐり抜けて近づいていた。

「おい、ちょっと君！ここは立ち入り禁止だぞ！」

警官の一人が鋭い声で夏美を制止する。

「…その、シートの下」

夏美の喉から、自分でも驚くほどかすれた声が出た。

「人探してるんです。もしかして、首に太い傷のある男じゃありませんか？」

警官は怪訝な顔をしたあと、港湾関係者と顔を見合わせた。

「あんた、この仏さんの関係者か？」

「…仏？」

「今朝、この防波堤のすぐ下のテトラポットに引っかかってたんだよ」

警官は手帳を取り出しながら言った。

「身元を証明するものは何も持ってなかった。着衣はボロボロのスーツで、右手に布が巻かれていた。顔は…波と岩に打たれて判別が難しいが、首に古い傷跡があったのは確かだ」

夏美の目の前で、容赦ない沖繩の太陽が明滅した。

「…死んだ、の？」

「おそらく、昨夜のうちに足を滑らせて海に落ちたんだろう。金目当てのトラブルか、ただの事故かは解剖してみないとわからないが」

警官がブルーシートの端を少しだけめくった。

そこに見えたのは、水にふやけ、どス黒く変色した右腕。そして、その腕に巻き付けられた血まみれの包帯。鉄也のプレハブから逃げる時に噛みちぎったという、あのロープの傷を隠すためのものだ。

「…トラオ」

足の力が抜け、夏美はその場にへたり込んだ。

（いつか夏美にみせてやりたいな。世界一の海さ）

アパートでオリオンビールを飲みながら笑っていた男の顔が、波の音にかき消されていく。嘘だ。あんなにしぶとく、泥水をすすって生きてきた男が、こんなあっけなく海に落ちて死ぬはずがない。三千万はどうなった？ 鉄也から逃げ延びたのに、なぜここで終わる？

「あんた、知り合いなら署まで同行してもらえるか？ 身元確認を手伝ってほしい」

警官の声が、遠くのラジオのように聞こえた。

夏美は震える手でスマホを取り出した。

タツヒコの番号に発信する。三回のコールのあと、タツヒコが出た。

『どうした、夏美。見つけたか』

「…タツヒコさん」

夏美の声は、ひどく乾いていた。

「トラオが……死にました」

電話の向こうで、タツヒコが息を呑む気配がした。

「今朝、泊港の海に浮いてたって。顔はわからないけど、特徴が全部一致してます。……間に合いませんでした」

長い沈黙のあと、タツヒコが低く静かな声で言った。

『…わかった。もういい、お前はそこから手を引け』

「でも、三千万は」

『死んだ人間からは回収できない。これ以上お前が警察の事情聴取に巻き込まれれば、御大の店にまで火の粉が飛ぶ。死体の確認は適当に誤魔化して、今日中に横浜へ戻ってこい』

「タツヒコさん！」

『戻れ、夏美。仕事の時間は終わりだ』

電話は一方的に切られた。

夏美はスマホを握りしめたまま、眩しすぎる海を見つめた。

約束の三日目。

彼女の「お礼参り」は、憎む相手も、愛した相手もないまま、この世界一の海であっけなく幕を下ろした。

背中の観音菩薩は、恐ろしいほどの沈黙を守っていた。まるで、この結末を最初から知っていたかのよう。

港の防波堤から、夏美はそのまま署へ連れていかれた。

冷房の効きすぎた取調室は、泊港よりもずっと寒かった。

白いテーブルと、金属の椅子。壁際には安っぽいスチール棚。

警官が二人、向かい合う形で座っている。

一人はさっき防波堤で「仏さん」と言った男で、もう一人は若い女刑事だった。

「さっきも言ったけどね」

女刑事がボールペンを回しながらいう。

「身元不明の遺体に、知り合いかもしれない人間がいるなら、ちゃんと記録に残しておきたいの」
机の上には、薄い書類の束が置かれていた。

その一枚の上部には、「身元不明男性（推定三十代）」という文字が印刷されている。

「名前も、住所も、わからないんです」

夏美は、指先を膝の上で組んだままいう。

「トラオ……って呼んでましたけど、本名じゃないと思う」

「それでもいい」

女刑事はペンを止めた。

「あなたがここに書けるだけ書いてくれれば、それが一つの『仮の身元』になる。

川崎での仕事先でも、横浜でも、どこかで照合がかかるかもしれないから」

用紙の下の方には、「関係者記録」という欄があった。

氏名、連絡先、遺体との関係性。

最後の行には、「遺体が本人である可能性について」のチェックボックスが三つ並んでいる。

☐ 高い

☐ どちらともいえない

☐ 低い

「……どちらともいえない」

夏美はボールペンを持ったまま、三つの四角を交互に見つめた。

震えそうになる指を、なんとか押さえ込む。

——トラオが海に落ちた。

——首に傷があった。

——右手に布を巻いていた。

事実、全部あっている。

でも、そこに「トラオ」という名前を書いた瞬間、この世界から本当に一度消えてしまう気がした。
（お礼参り）

川崎の古い六畳間。

百均のビニールクロスの上に並べたオリオン缶。

わざと大きな声をあげた夜。

そのあと、トラオの体温が確かにそこにあった。

背中の観音菩薩が、じわりと熱を持った。

—書くな。

短い、一言だけの声だった。

命令でも叱責でもない。

「いまここで終わらせるな」という、淡い拒否の気配。

夏美は、ペン先を紙からそっと離れた。

「……『どちらともいえない』に、しておいていいですか」

夏美は顔を上げた。

「顔も、はっきり見えなかったし。私がここで決めることじゃない気がします」

女刑事はしばらく夏美を見つめていたが、やがて小さくため息をついた。

「わかったわ。こっちで『参考人』扱いにしておく」

あなたの連絡先と、今いる場所だけは書いておいて」

用紙の端に、「今村夏美」という名前と関内のマンションの住所を書いた。

ペンのインクが、妙に濃く紙に滲んだ。

「お願いがあるんだけど」

帰り際、女刑事がいった。

「もし、そのトラオって男が生きてるって連絡が入ったら、すぐに教えて」

「え？」

「こういうの、たまにあるのよ」

女刑事は、少しだけ笑った。

「『仏』だと思ってた人間が、別の場所で酒飲んでるってパターン。紙の上で死んでることにされた人間ほど、しぶとく生きてたりするから」

夏美は、返事ができなかった。

観音菩薩が、背中の中で小さく脈打っている。

署を出ると、午後の日差しが容赦なく照りつけた。

泊港へ続く道路のアスファルトが白く光っている。

（紙の上で、トラオを一度殺した）

そんな感覚が、胸の奥に居座っていた。

スマホを取り出し、画面に映る「タツヒコ」の名前をタップする。
さっきの電話の続きを、もう一度かけ直すために。

横浜へ戻れ――。

タツヒコの声と、女刑事の「仏は紙の上で決めるな」という薄い笑いが、頭の中で交差した。

那覇から羽田へ戻る飛行機の中で、夏美はずっと目を閉じていた。

泊港の防波堤で見た、ブルーシートの下の水死体。ふやけた腕に巻かれた血まみれの包帯。トラオは死んだ。タツヒコは電話越しに「お前の仕事は終わりだ」と冷たく言い放ち、夏美を横浜へ呼び戻した。

関内のマンションに帰り着いた時、部屋の無機質な白さが、やけに目に刺さった。

翌日の夜から、夏美はすぐにキャバクラの仕事に復帰した。

「……戻ったんだ」

更衣室でメイクを直していると、美晴が隣に座り、細い煙草に火をつけた。

「はい。トラオは……死んでました」

夏美が鏡越しに淡々と答えると、美晴は煙を吐き出しながら、どこか探るような視線を向けた。

「ふーん。あつけないわね」

「ええ。だから、また今日から稼ぎます」

夏美はリップを強く塗り直した。川崎での「お礼参り」も、トラオへの憎しみも、すべてが中途半端なまま海の底に沈んだ。残されたのは、背中の観音菩薩と、この横浜の「終わらない夜」だけだ。

VIPルームでの夏美は、以前よりもさらに冷たく、そして美しく客をあしらうようになった。

トラオという鎖が切れたことで、逆に夏美の目から未練のようなものが消え、それが皮肉にも男たちをさらに惹きつけた。

深夜、店が終わった後の事務所で、タツヒコが札束の入った茶封筒を無造作にデスクに放り投げる。

「御大が、今夜のお前を褒めていたぞ。目がすっかり据わったってな」

タツヒコの声には、いつもの冷たい響きの中に、ほんのわずかな濁りがあった。

夏美は封筒をリュックに押し込みながら、タツヒコを見た。

「タツヒコさんは、これでよかったんですか。三千万の行方も、結局わからずじまいで」

タツヒコは煙草を咥えたまま、目を細めた。

「死体が出た以上、川崎の連中もこれ以上騒ぎを大きくはできない。三千万は闇に消え、お前は無事に横浜に残った。ビジネスとしては最高の着地点だ」

タツヒコはそう言ったが、その目が一瞬だけ伏せられたのを、夏美は見逃さなかった。

16

16

横浜の真夏の夜は、まるで終わりのない夢のようだった。

夏美はナンバー入りのキャバ嬢として、美晴と肩を並べるほどの売上を叩き出すようになっていた。金
は湯水のように入り、高級マンションの暮らしにもすっかり馴染んでいた。

だが、どれだけ高い酒を飲み、どれだけブランド物を買っても、胸の奥の空洞は埋まらなかった。

その夜のVIPルームの客は、御大ではなかった。

代わりに座っていたのは、地方の建設会社の社長だと自称する、腹だけ出た中年男だった。

「いやあ、最近はや、現場がぜんぶ海外にとられちゃってよ」

男は水を溶かしながらグラスを傾ける。

「こっちはこっちで、下の連中の給料上げろってうるさいし。まったく、どいつもこいつも、俺の懐が無
限に広いと思ってやがる」

夏美は、笑顔だけを貼り付けていた。

社長の話の内容は、ほとんど頭に入っていない。

ただ、「現場」「給料」「海外」という単語だけが、どこか遠くで反響している。

（アスベスト。日当三万）

川崎の現場でトラオと汗まみれになって働いていた夜のことを、観音が皮膚の下から引っ張り上げて
くる。防塵マスク越しの呼吸。肺の奥のガサつき。あのとき、日当の重さは、酒のボトル一本分よりずっ
と重かった。

「ねえ、お嬢ちゃん」

社長が唐突にいう。

「お前さん、川崎の出身か？」

「……どうですか」

「匂いがするからさ」

男は、笑いながら顎を撫でた。

「昔、向こうで下請けやってたときに、同じような目をした女を何人か見た。
泥水すすって、少しだけこっち側に上がってきた連中の目だ」

川崎のアパートの天井のシミが、ふいに脳裏に浮かんだ。

百均のビニールクロス。オリオン缶。

【オレたち別れよう】の紙切れ。

「今は、川崎じゃありません」

夏美は、グラスを拭きながらいう。

「横浜です。関内。少しだけ、地獄の等級が上がっただけ」

「はは、いいこと言うねえ」

男は嬉しそうに笑い、夏美の手の甲に指を伸ばした。

「地獄にもランクがある。俺はできれば、上のほうの地獄で死にたいもんだ」

その指先が、観音菩薩の肩口に近づいた瞬間、夏美はすっと身を引いた。

「触るなら、グラスだけにしてください」

声は柔らかく、目だけが冷たかった。

「背中が、客のものじゃないんで」

男は一瞬だけ不服そうな顔をしたが、すぐに肩をすくめた。

「タツヒコ君が言ってたよ。お前さんの背中には、店ごと売れるくらいの神様が入ってるってな」

男は、氷を噛み砕きながら続けた。

「そういう女の一人や二人は、俺も見てきた。けど、神様の口を塞いじまった女は、ろくな死に方しなかった」

「……神様なんて、もともとろくでもないですよ」

夏美は、氷を入れ替えながらうっすら笑った。

「助けてくれるわけでも、守ってくれるわけでもない。」

ただ、『仕事はちゃんとやれ』ってうるさく言ってくるだけですから」

男は一瞬だけ黙り、やがて腹の底から笑い出した。

「気に入ったよ。そういう諦観がある女は、こっち側の人間だ」

彼は名刺を一枚、テーブルに差し出した。

どこかで見たことのある建設会社のロゴが印刷されている。

「仕事で地獄が足りなくなったら、うちの現場にも顔出しな。」

横浜の地獄より、もう少しだけ『日当のいい地獄』が揃ってるから」

夏美は、その名刺を一瞥してから、観音のあたりに視線を落とした。

（日当のいい地獄）

タツヒコに言った自分の言葉が、別の男の口から返ってきた気がした。

川崎の倉庫とアスペクトの現場。横浜のキャバクラ。

どこを切っても、「地獄」という文字がついて回る。

その夜の売上は、タツヒコの店の歴代最高記録に近かった。

御大以外の客も次々と札束を置いていき、ボトルは何本も抜かれた。

深夜、店が終わったあと。

更衣室でドレスを脱ぎ、Tシャツに着替えた夏美は、ロッカーの棚に置いた名刺をじっと見つめた。

関内のマンションの白いテーブルの上には、同じような名刺が何枚も重なっている。

誰かの地獄への招待状ばかりだ。

背中の観音菩薩は、静かだった。

さっきの社長の指が触れかけたときに一瞬熱を持った以外、今日は何も言わない。

「……地獄のランク、ね」

夏美は、名刺を一枚だけリュックに入れ、それ以外はロッカーの奥に押し込んだ。タツヒコの顔を、少しでも思い浮かべる。

彼なら、この名刺の束を見て、どんな商売の計算をするだろうか。

鏡の前で髪を束ね直しながら、夏美は自分の目をじっと見た。

川崎のドブを見ていた頃の目とも、泊港のブルーシートを見ていた目とも違う。

何かを諦めて、何かをまだ諦めきれずにいる女の目だ。

その目のまま、彼女はVIPルームの灯りがすっかり落ちた廊下へ出た。

ある夜、営業後の店の裏階段で、夏美はハーブ煙草をふかしていた。

蒸し暑い風が、ドレスの開いた背中を撫でていく。

「お前、最近よくここで煙草吸ってるな」

背後から声がして振り返ると、タツヒコが壁に寄りかかっていた。

「タツヒコさん。……別に、客の匂いを消してるだけです」

「嘘だな」

タツヒコは隣に並び、自分の煙草に火をつけた。

「お前は、まだ川崎のドブの匂いを忘れられないでいる。トラオが死んだってのに、お前の背中の中の神様は、まだどこか別の場所を探してる顔だ」

タツヒコはそう言って、夏美の背中の中の観音菩薩をじっと見つめた。

「……そんなことはありません」

夏美が視線を逸らすと、タツヒコは不意に夏美の髪に手を伸ばした。

その指先は、夜の街を泳ぐ男の冷たさではなく、不器用なほど優しい温度を持っていた。夏美は一瞬、息を止めた。

「夏美」

タツヒコが何かを言いかけた時、裏口のドアが開き、ボーイがタツヒコを呼びに来た。

「……またな」

タツヒコは手を引っ込め、足早に店の中へ戻っていった。残された夏美は、火の消えた煙草を握りしめたまま、その背中を見送ることしかできなかった。

その数日後の夜。

マンションのベッドで浅い眠りについていた夏美は、背中の強烈な熱で目を覚ました。

焼けるような痛みが走り、思わずシーツを握りしめる。

暗闇の中、観音菩薩の声が耳の奥で直接響いた。これまでのような「仕事はちゃんとやれ」といった指示ではない。もっと重く、不吉な響きを持った「未来予測」だった。

――横浜（横浜）の夜が、終わる。

夏美は跳ね起きた。

観音の熱は、火傷というより「発光」に近かった。

背中の皮膚の下で、何かがじわじわと光を溜めていき、その光が肋骨の隙間から漏れ出して部屋の暗闇を薄く照らしているような気がした。

まぶたを閉じた瞬間、映像が一気に流れ込んできた。

最初に見えたのは、川崎の木造アパートの狭い廊下だった。

湿った畳の匂い。百均のビニールクロス。

オリオンの缶を並べて、トラオを待っていた夜。

ドアの向こうから、あの間の抜けた声が聞こえてくるはずなのに、今回は何も聞こえない。

代わりに、廊下の奥に黒い影が一人立っている。

影は、タツヒコにもトラオにも似ていた。

安いTシャツと、薄いスーツの境目が曖昧な男の輪郭。

顔は見えない。

ただ、肩から煙草の煙だけが立ち上っている。

次に、泊港の防波堤が見えた。

真昼の白すぎる太陽。

海面に浮かぶブルーシート。

さっき取調室で書いた「身元不明男性」の紙が、風に吹かれて海に落ちていく。

（紙の上で、一度殺した人間）

女刑事の声が遠くで響く。

その紙を、海の底から誰かが拾い上げる。

濡れた手。血まみれの包帯。

指の節が、タツヒコと同じ形をしている。

川崎と泊港と、関内の裏階段が、一枚の写真みたいに重なった。

裏階段では、タツヒコがいつものように煙草をふかしている。

夏美がハーブ煙草を吸っていた位置に、今度は誰もいない。

風だけが、誰もいない階段を吹き抜けていく。

観音の声が、その重なった映像の中で低く囁いた。

―横浜（ここ）の夜は、誰かの血で終わる。

誰か。

それが誰なのか、観音は言わない。

タツヒコかもしれないし、山倉かもしれない。

あるいは、自分自身かもしれない。

夏美は息を吞んで目を開けた。

天井の白さが、さっきまで見ていた映像の色と重なって見えた。

心臓が、背中の熱と同じリズムでドクドクと脈打っている。

「あのさ」

誰に向かって話しかけているのかわからない声が、口から漏れた。

「そういうの、もう少し早く言ってくれても良くない？」

観音菩薩は、何も答えなかった。

ただ、さっきまでの焼けるような熱を少しだけ弱め、皮膚の下で静かに脈動を続けている。

額に冷や汗が浮かんでいる。神のお告げだ。川崎の待機所でトラオが消えた朝に聞いたのと同じ、

絶対的な警告の気配。

夏美は嫌な予感に駆られ、スマホを取り出してタツヒコに電話をかけた。しかし、何度かけてもコール音が虚しく響くだけで、タツヒコは出なかった。

窓の外を見ると、関内のネオンがいつもより赤黒く滲んで見えた。

何かが、水面下で動き出している。川崎の山倉たちが、トラオの死に納得せず、再び横浜のタツヒコに狙いを定めたのか。

夏美はベッドから降り、着の身着のままマンションを飛び出した。

だが、夏美の行動は遅すぎた。

翌日の昼過ぎ、店の事務所に飛び込んできた美晴の悲鳴が、すべてを終わらせた。

「タツヒコが……刺された」

関内から一本裏に入った路地裏。

夜の街の顔役として、危ない橋を何度も渡ってきたタツヒコが、背中と腹を複数回刺されて死んだ。ニュースは「暴力団関係者同士のトラブルか」とだけ報じていた。

薄いワイドショーのテロップの下に、モザイクのかかった路地の映像が流れている。

画面隅には、「関内」「未明」「男性死亡」の文字。

店長も美晴も、そして夏美も、それが誰の仕業か痛いほどわかっていた。

「山倉だ……」

店長が青ざめた顔で頭を抱える。

「あいつら、トラオの死体じゃ三千万の帳尻が合わなくて、ずっとタツヒコに探りを入れてたんだ。『金の場所教える』『御大の取り分はどこだ』ってな……」

事務所のテレビからは、アナウンサーの淡々とした声が続いている。

『——現場には複数の刃物が残されており、警察では、複数人による犯行の可能性もあるとみて……』

その「複数人」の中に、川崎の山倉の顔と、相模原の鉄也の顔が自然と浮かんた。

トラオが噛み切ったロープ。ネコババされた三千万。

そして、タツヒコが横浜で引き受けた「火種」。

夏美は、店の裏階段に座り込んでいた。

数日前に、タツヒコが不器用な手つきで髪に触れてきたあの場所。

今は昼間の光が差し込んでいるだけで、煙草の煙も、ハーブの匂いもない。

「なんで……」

喉の奥から、掠れた声が漏れた。

私が川崎から逃げてきたせいで。

私の「お礼参り」のせいで、三千万が消え、トラオが消え、タツヒコが死んだ。

観音菩薩は、背中の中で微かな熱を保ったまま、沈黙している。

「逃げるな」と言った夜の声も、「横浜の夜が終わる」と告げた昨夜の声も、今は何も言わない。

階段のコンクリートが、じわじわと体温を奪っていく。

ヒールの先に、誰かの煙草の吸い殻が押しつぶされて残っている。

フィルターの色が、タツヒコの吸っていたブランドと同じだと気づいた瞬間、胸がきゅっと縮んだ。

「あんたのせいじゃないよ」

頭上から、美晴の声が降ってきた。

夏美が顔を上げると、裏階段の入口に美晴が立っていた。

いつもの派手なドレスではなく、シンプルなTシャツにジーンズ姿。

目元だけが、泣き腫らしたように赤い。

「……本当にそう思ってます?」

「思っていない」

美晴は階段を一段降り、夏美の隣に腰を下ろした。

「でも、そう言わないと、あんた今ここで飛び降りかねない顔してる」

夏美は、膝に顔を埋めた。

視界の端で、関内のビルの隙間から見える空が、妙に白く眩しい。

「あの時、裏階段で煙草吸ってたタツヒコの背中……」

美晴がぼつりと言う。

「いつもより、なんか軽くなってたんだよね。」

あいつ、何か言いかけて、途中でやめたことなかった?」

数日前の夜の記憶が、じわじわと浮かび上がる。

裏階段で二人並んで煙草を吸っていたとき、タツヒコは夏美の髪に手を伸ばし、「夏美」と呼びかけかけた。

その続きは、ボーイに呼ばれて飲み込まれたままだ。

「……あります」

夏美はかすかに頷いた。

「『夏美』って名前呼ばれて、それっきり」

「そういうの、夜の男はよくやるよ」

美晴は煙草の箱を取り出したが、火をつけずに戻した。

「言わなかった言葉の分だけ、生き延びたつもりでいるうちに、先に殺される」

タツヒコは、あの裏階段で何を言おうとしたのか。

「横浜から逃げる」と言うつもりだったのか。

それとも、「一緒に逃げよう」と言いかけたのか。

考え始めると、喉の奥が痛くなった。

「タツヒコはさ」

美晴が続けた。

「最後まで、あんたのこと、『客の女』じゃなくて『こっち側』として見てたよ。

だから、御大に頭下げてまであんたを守ろうとしたんだろうし、山倉の連中の怒りも、自分のところで止めようとした」

「その結果が、これです」

夏美は、足元のコンクリートを見た。

「タツヒコは死んで、私はまだここにいる」

「そう」

美晴はあっさりと言った。

「だから、生きてる方が何とかするしかないの。あんたの背中の観音様が、そういう目をしてる」

夏美は、背中に意識を向けた。

観音菩薩の線が、汗で少しだけ痒い。

でも、熱はさっきより落ち着いている。

タツヒコの死は、観音にとっても「予定外」だったのかもしれない。

それでも、神は何も言わない。

これはタツヒコ自身が選んだ「因果」だと、遺書に書くためだ。

店の中からは、営業再開に向けた準備の音が聞こえてきた。

氷を砕く音。グラスを拭く布の擦れる音。

誰かの笑い声が、無理やり作ったテンションで廊下まで漏れてくる。

横浜の夜は、もっとも残酷な形で終わってしまった。

でも、この街のネオンは何事もなかったようにまた点く。

「……あんたに一つだけ言っとく」

美晴が立ち上がりながらいった。

「タツヒコの死体は、もうどうにもならないけど、あいつの書いたものなら、まだこっち側にあるから」

「書いたもの？」

「遺書だよ」

美晴はため息混じりに笑った。

「まさかアイツ、自分が死ぬ前にまで、女に仕事増やすとは思わなかったけどね」

夏美は顔を上げた。

観音菩薩が、皮膚の下で小さくうなずいた気がした。

タツヒコの死は、「横浜の夜の終わり」に過ぎない。

その先にまだ、南へ伸びる細い廊下が続いている。

そこにトラオがいるかどうかはわからない。

でも、「お礼参り」を途中でやめたまま、この街で腐ることだけは、観音が許さない。

夏美はゆっくりと立ち上がった。

膝が少し震えていたが、階段を一段ずつ降りていく足取りは、意外なほど確かだった。

背中の観音菩薩は、今は静かだった。

何も命じゃない。

ただ、タツヒコの血の匂いが遠くからかすかに届くこの街で、彼女の肩甲骨のあたりに寄り添っているだけだった。

タツヒコが死んで数日が経った頃。

マンションの部屋に引きこもっていた夏美の元に、美晴が訪ねてきた。

彼女の目は赤く腫れ上がり、いつもの強気なオーラは見る影もない。美晴は無言のまま、バッグから赤いインク（おそらくタツヒコの血だ）が端に少しついた白い封筒を取り出し、テーブルに置いた。

「……これ、タツヒコが遺した手紙」

美晴の声は震えていた。

「あいつが死んだ現場の近く、いつもタバコ吸ってた裏路地のパイプ管の裏に隠してあった。私に『もし俺が死んだら、夏美に渡してくれ』って、前に合鍵と一緒に預けられてた場所」

夏美は息を呑み、震える手で封筒を開けた。

そこには、少し乱暴で右肩上がりの文字が並んでいた。

『夏美へ

おそらくこの遺書を読んでいるということは、オレはすでにこの世にいないだろう。夜の街で嘘ばかり吐いて生きてきたオレが、最後に残せる本当の言葉はこれだけだ。いつかこんな日が来ることは分かっていた。だから、お前がいつか横浜の冷たい風に吹かれて一人きりになった時のために、これを書き残しておく。キャバクラの裏階段でハーブ煙草をふかすお前の背中、あの熱を持った観音様を見るのが好きだった。お前の心はずっと別の場所を、あのどうしようもない過去を彷徨っていたのも知っていたよ。それでも、いや、だからこそ。夏美、お前を心から愛していた』

涙が視界を滲ませた。

『オレが本気でお前を縛り付けようと思ったら、この事実が墓場まで持っていくべきだったんだろう。でも、お前が夜ごと誰かの影を探して息を詰まらせているのを見るのは、オレの柄にもなくキツかった。裏のツテを使って調べさせた。お前が愛していたトラオは生きている。あいつがなんでお前から姿を消したのか、詳しい事情までは探れなかった。ただ、借金か現場のトラブルに巻き込まれて、今は南の島に逃げ込んでいるらしい。トラオは沖繩の松山にいる。那覇のネオン街だ。そこであいつも、あいつなりの地獄を這いずり回っているんだろう。追いかけるか、それとも完全に忘れるかは、お前が決める。ただ、もう横浜（ここ）にはいちゃ駄目だ。お前の背中の中の神様が、これ以上泣かない場所へ行け。自分のために生きろ。今度こそ、幸せになれよ。オレのことなら気にするな。間違えても犯人を探すとか復讐するとか考えるな。オレは殺されてもおかしくない生き方をしてきた。だから、これはオレの因果だ。お前

が背負う必要は一ミリもない。お前の「お礼参り」に、オレの復讐なんてくだらないものを混ぜるな。最後のお願いだ。海を渡って、ちゃんと自分の足で太陽の下を歩け。オレみたいな夜の亡霊のことは、綺麗さっぱり忘れていい。じゃあな、夏美。短い間だったけど、悪くない夢だった。 下原達彦』

夏美は声を上げて泣いた。

タツヒコは、泊港の水死体がトラオではないと知っていたのだ。そして、山倉の刃が自分に向くことを覚悟の上で、夏美を守るために「トラオは死んだ」と嘘をつき、一人で横浜で決着をつけようとしていた。

「追伸も、読みなよ」

美晴がハンカチで目を押さえながら言った。

『追伸 金のことなら心配するな。横浜駅のコインロッカーに1000万入ってる。場所は美晴が知っている。お前と美晴で山分けしてくれ。大半は美晴が貢いでくれた金だ。だから半分はアイツにやってくれ。おそらく夏美と美晴は犬猿の仲かもしれないが、美晴にも手紙を書いてある。オレが死んだら夏美をよろしく、と。アイツは確かに性格悪い女だが、根は優しい奴だ。きっとわかってくれるはずだ。これまでの無礼も許してやってほしい。人間はみな孤独と隣り合わせて生きてる。夏美と同じように美晴だってたくさんの傷を抱えて生きてる。頭の良い夏美ならオレの言いたいこと解るよな？ では、オレの運が良ければいつか天国で会おう。その時こそ、お前を振り向かせてみせる』

便箋を握りしめる夏美の肩を、美晴がそっと抱いた。

「……ほんと、バカな男。死んでからいい顔するなんて」

「美晴さん……」

「あの1000万、半分はあんたに渡す。だから」

美晴は夏美の目をまっすぐに見つめた。

「行きな。タツヒコが遺した金と命で、あんたは沖縄へ行きなよ。そして、その背中の中の神様ごと、あのトラオって男を見つけてきな」

夏美は強く頷いた。

背中の中の観音菩薩は、静かだった。もう何も命じない。

夏美は初めて誰の命令でもなく、タツヒコの愛と自分の意思で、再び沖縄へ向かうことを決意した。

翌朝の羽田空港。

夏の容赦ない日差しが、出発ロビーのガラス窓を白く光らせていた。

夏美は紫色のリュックを背負い、ゲートの前に立っている。

リュックの中には、タツヒコが遺した手紙と、美晴から受け取った五百万円の札束が入っている。

見送りに来た美晴は、大きなサングラスで目を隠していた。

それでも、目元の赤さは隠しきれない。

「向こうに着いたら、連絡くらいは寄越しなよ」

「うん。美晴さんも、体に気をつけて」

二人は短くハグを交わした。

川崎の待機所で初めて会った時の、あの刺々しい空気はもうどこにもなかった。

「夏美！」

搭乗口へ向かう夏美の背中に、美晴が声をかけた。

「あんたの『お礼参り』、絶対に終わらせてきなよ！」

夏美は振り返り、力強く手を振った。

飛行機に乗り込むと、座席の窓から海が見えた。

タツヒコが言った通り、復讐なんてくだらないものに人生を使う気はない。

この手にあるのは、タツヒコがくれた「新しい命の切符」だ。

（トラオは沖繩の松山にいる）

手紙の言葉を頭の中で反芻する。

生きているなら、なぜ連絡をしてこなかったのか。

あいつは沖繩のネオン街で、何から逃げ、何を抱えて這いずり回っているのか。

背中の観音菩薩が、じんわりと温かくなった。

もう、「南に向かえ」とは言わない。

ただ、夏美の体温と同じ温度で、そこに静かに寄り添っているだけだった。

「……行くよ、トラオ」

夏美は窓の外の青い空に向かって呟いた。

飛行機は、夏の太陽に灼かれた南の島へ向かって、一直線に空を切り裂いていった。

那覇空港のタラップを降りても、今回は観光客のざわめきに紛れて浮かれる気分にはならなかった。二度目の沖縄だ。タツヒコの手紙と、美晴から託された札束を抱えているという事実が、夏美の背中を普段より重くしていた。

松山へ向かう途中、タクシーを降りて少し歩いてみることにした。

昼の那覇は、相変わらず容赦なく眩しい。国道沿いのコンクリートの建物が白く光り、アスファルトからむっとした熱が立ち上っている。

汗が額を伝い落ちる頃、ふいに、風の向こうから柔らかい弦の音が流れてきた。

三線―沖縄の楽器だ、と頭のどこかで知っていた。

その音色は、東京の地下のカラオケやクラブで聞くギターとも、川崎の隣人の安いアコギとも違う、骨の内側にじんわり染み込むような響きをしていた。

夏美は、音のする方へ自然と足を向けていた。

路地を一本入った先に、小さな商店があった。

古い看板の下に、プラスチックの椅子が並べられている。店先の軒先で、細身の中年の男が三線を抱え、指先で弦を爪弾いていた。

皮の張られた胴から、乾いたのにどこか湿り気を帯びた音が、昼の光にゆっくりと溶けていく。

その瞬間、川崎の木造アパートの薄暗い畳の部屋に立てかけられていた「母の三味線」が、まざまざと目の前に蘇った。

遺影の前に置いたミニチュアサイズのオリオン。三味線の棹に触れるのが怖くて、ずっとそこにあるふりをしていた自分。

（音色は、こんな感じだったっけ）

夏美は、自分の記憶と目の前の三線の音を重ねようとした。

背中の観音菩薩が、じんわりと熱を持った。

三味線と三線。川崎と沖縄。母とトラオ。全部別物のはずなのに、今だけは一本に繋がっているように思えた。

「観光ですか？」

男が顔を上げ、三線の棹を軽く支えながら声をかけてきた。

「……人探しです」

夏美が答えると、男は「そりゃ、三線より厄介だな」と笑った。

その笑い方が、どこかトラオに似ていて、胸の奥がきゅっと縮んだ。

「いい音ですね」

そう言ってしまったから、自分がそんなことを口にするタイプだったか、と夏美は少し驚いた。三味線の音なんて、母の死後はほとんど聞かないようにしてきたのに。

「昔、家に似たようながありました」

夏美が続けると、男は「お母さんが三味線弾いてたのかい？」と、まるで前から知っていたかのように言った。

「……はい。もう、いないですけど」

「そっか」

男は短く相槌を打ち、さっきより少し丁寧な指つきで弦を鳴らした。

三線の音が、ほんのわずかだけ哀しみの色を帯びる。

観音菩薩の音が、皮膚の下で小さく震えた。

――聞け。

これまでの「仕事はちゃんとやれ」「南に向かえ」といった命令ではない。ただ一言、「聞け」という静かな囁きだった。

夏美は、その場で立ち尽くしたまま、しばらく三線の音に耳を傾けた。

母の三味線の音が、頭の奥で解凍されていく。パン屋をやったかった母の夢。山梨の実家。オリオンビールの缶。三味線の縁側に座る母の指先。そして、「世界一の海」を見せたいと言っていたトラオ。

音が途切れた時、男は笑って三線を膝に置いた。

「人探しは、音よりも足だよ。松山の方に用があるんだろ？」

「……どうして、わかるんですか」

「さっき、タクシー降りたとこ見たからね。あの辺に行く人は、だいたい夜の匂いしてる」

男はそう言って、顎で国道の向こう側を示した。

「松山はネオンの海だ。迷い込んだら、音なんて聞こえなくなる。だから今のうちによく聞いときな」

夏美は、背中の熱を意識した。

観音菩薩が、三線の音を通して母の声を思い出させているような気がした。

（お礼参り）

川崎で聞いたあの言葉が、沖縄の陽射しの中で少し違う意味を帯びてくる。

「ありがとうございます」

夏美は一礼し、紫色のリュックを背負い直した。

松山のネオンの方へ歩き出す足取りは、不思議と軽かった。音を背中に貼り付けたまま歩いているような感覚があった。

角を曲がると、急に空気の温度が変わった。

昼間の光の中でも、ビルの隙間から夜の匂いが立ち上ってくる。

松山の入り口だ。

派手な看板の下には、セクキャバやジオンのような店の客引きたちがたむろしている。

その中に、やけに目つきの鋭い半グレ風の男が一人いた。その男は、最初に夏美のリュックと目を値踏みするように見てから、ニヤリと笑った。

すれ違いざま、男から安いコロンと、どこか鉄錆のような匂いがした。

川崎の倉庫裏で嗅いだことのある匂いだ。夜の街で、他人の弱みに漬け込んで生きている人間の特有の体臭。

「おねえさん、キャリアケースも持たずに観光？ それとも、誰か探し人？」

ユースケが、行く手を塞ぐように立ち塞がった。

浅黒く日焼けした肌に、無造作に伸ばした髪。薄手の柄シャツの胸元からは、和彫りではない、トライバル調のタトゥーが覗いている。

「：どっちでもいいでしょ」

夏美は視線を逸らさずに答えた。川崎や横浜で、この手の男のあしらい方は嫌というほど学んできた。弱みを見せれば、すぐに足元をすくわれる。

しかし、ユースケの目は夏美の顔ではなく、紫色のリュックの膨らみに吸い寄せられていた。

「随分と重そうなりゅックだね。松山（ここ）はね、匂いに敏感な街なんだよ。特に、東京から流れてきたワケアリの女と、その背負ってる『金』の匂いにはね」

ドクン、と夏美の心臓が鳴った。

リュックの中には、タツヒコが遺した500万が入っている。ただの紙切れの束だと思っていたそれが、今は異常な質量を持って背中の中のしかかってくるのを感じた。

「どいて」

夏美は短く言い捨てて、ユースケの脇をすり抜けようとした。

男は無理に追っては来なかった。ただ、背後からねっとりとした声がまとわりついてきた。

「夜になったら、また会おうぜ。この街は狭いからな」

夏美は振り返らずに足早に路地を抜けた。

背中の観音菩薩が、警告するように微かに熱を帯びている。タツヒコがくれた命の代償である500万。これが知られれば、トラオを見つける前に、自分が沖縄の裏社会の餌食になる。

（早く、拠点を確保しないと）

夏美は警戒しながら、松山の中心部へと歩を進めた。

陽が落ちると、松山の街はまるで別の生き物のように姿を変えた。

ネオンが眩しく点滅し、三線の音色は重低音のクラブミュージックにかき消された。客引きの男たちが道を塞ぎ、派手なドレスを着た女たちが行き交う。

夏美はビジネスホテルにチェックインして大半の金を隠すことも考えたが、ユースケのような連中がフロントと繋がっている可能性を考えると、安易に宿を取ることもためらわれた。

とにかく、トラオの情報が欲しい。裏の事情に詳しく、かつユースケのような半グレとは違う「女」の口から。

『CLUB ZION』『熟女パブメグミ』『セクキャバNANA』……。

雑居ビルの案内板を見上げながら、夏美の視線は一つの看板に止まった。

「セクキャバ……」

自分が川崎でやっていたデリヘルよりは少し明るく、キャバクラよりは泥臭い。ここなら、流れ者の男の情報が転がっているかもしれない。

夏美はリュックを抱え直すと、薄暗い階段を地下へと降りていった。

重い防音扉を開けると、甘い香水とアルコールの匂いが鼻をついた。

「いらっしやいませー」

気怠そうなボーイの声が響く。客席はまだまばらで、奥のボックス席で一人の女がスマホを弄っていた。ショートボブに、露出の多い赤いドレス。派手なメイクの下にある顔立ちは、まだあどけなさが残っている。

「女の子、一人？」

ボーイが怪訝な顔をするのを遮り、夏美は財布から一万円札を一枚抜き出してカウンターに置いた。

「少し、話を聞きたいんだけど」

夏美が言うと、スマホを弄っていた赤いドレスの女が顔を上げた。

「え、私？ いいけど……おねえさん、同業者っしょ？」

女は面白そうに笑いながら、夏美の向かいの席に座った。

「私、ナナ。ねえ、何の探し物？ 男？ それとも……」

ナナの視線が、夏美の背中——薄着越しに透ける観音菩薩のシルエットに一瞬だけ止まった。

「……ヤバイ葉とか？」

沖縄の夜の底で、夏美は新しい蜘蛛の巣に足を踏み入れようとしていた。

22

22

「ヤバイ葉とか？」

向かいの席に座ったナナが、面白そうに小首を傾げた。

派手な赤いドレスから覗く谷間と、甘ったるい香水の匂い。その軽薄な態度とは裏腹に、彼女の目は夏美のリュックと背中を的確に値踏みしていた。

「葉じゃない」

夏美はカウンターに置いた一万円札を指先で滑らせ、ナナの前に押しやった。

「人探し。首に太い傷のある、ヤクザ上がりみたいな男。右手に、怪我を隠すための包帯か布を巻いてるはず」

ナナは一万円札を指の腹でトントンと叩きながら、ふうんと鼻を鳴らした。

「首に傷があって、ヤクザ上がりねえ。この街じゃ、そんなの珍しくもないけど」

「名前はトラオ。……偽名を使ってるかもしれない」

「トラオ……」

ナナはスマホの画面を伏せ、少しだけ真面目な顔つきになった。

「おねえさん、その男とどういう関係？ 借金取り？ それとも、捨てられた女？」

「両方」

夏美が短く答えると、ナナは「あはは！」と声を上げて笑った。

「最高。そういうドロドロした話、嫌いじゃないよ」

ナナはボーイに向かって指を鳴らし、ウーロン茶を二つ注文した。

「で、そのトラオって男、いつ頃こっちに来たの？」

「一週間くらい前。最後に足取りが確認できたのは、泊港の近く」

夏美が言うと、ナナの動きがピタリと止まった。

「……泊港？」

ナナの声のトーンが、一瞬だけ下がった。

「あそこ、数日前に水死体が上がったってニュースになってたけど。まさか、それじゃないよね？」

「その死体は、別の人だった」

夏美は言い切った。タツヒコの手紙の言葉を信じるなら、トラオはあの防波堤の死体ではない。

「あいつは生きてる。沖縄の松山にいて、確かな筋から聞いたの。だから、この街の女の子なら何か知ってるかと思って」

ナナは運ばれてきたウーロン茶のストローを咥え、しばらく夏美の顔をじっと見つめていた。

「おねえさん、名前は？」

「……夏美」

「そっか。夏美ちゃんね。あのさ、一つ忠告しとくけど」

ナナは声を潜め、テーブル越しに身を乗り出してきた。

「その男、もし本当に泊港の一件に絡んでるなら、あんまり派手に探さない方がいいよ。あの水死体、ただの事故じゃないって噂が、この辺の『上』のほうで回ってるから」

「上のほう？」

「そう。松山の裏を仕切ってる連中。……例えば、さっき表に立ってたユースケとかね」

ドクリと、夏美の心臓が鳴った。

リュックと背中を値踏みし、「観音様」と呼んだあの男の名前が、ここですぐに出てくるとは思わなかった。

「ユースケって、あの柄シャツの男？」

「会ったの？ なら話は早い」

ナナは顔をしかめた。

「あいつ、『ジオン』っていう裏カジノのオーナーなんだけど、最近この辺で幅利かせててき。本土のヤクザとも繋がってるって噂。もし夏美ちゃんの探してる男が、何かヤバイ金でも持って逃げてきたんだとしたら、真っ先にユースケの耳に入るはずだよ」

三千万。

鉄也がネコババした金だ。トラオはその金を持たずに逃げたはずだが、川崎の山倉たちは「トラオが持ち逃げした」と思っている。そして、その情報は本土から沖縄のユースケの耳にも届いているのだ。

だから、ユースケは夏美のリュックを見て「金の匂い」と言ったのか。

「……ナナちゃんは、ユースケの店には行かないの？」

夏美が探りを入れると、ナナは露骨に嫌そうな顔をした。

「行くわけないじゃん。あいつら、女を金づるか掛け札くらいにしか思っていない。花札の絵柄みたいに、用が済んだらポイよ」

「花札？」

「ジオンの裏カジノ、バカラやポーカーだけじゃなくて、奥のVIPルームじゃ昔ながらの花札賭博やってるんだって。しかも、賭けるのは金だけじゃないらしいよ」

ナナは意味ありげに肩をすくめた。

「だから、トラオって男が金に困ってるなら、ジオンに迷い込んでる可能性はある。でも、夏美ちゃんがそこに行くのはおすすめしない。あんたのその背中の『観音様』、ユースケのいいカモになりそうだし」

夏美は背筋が寒くなるのを感じた。

ナナは、夏美が背中に観音菩薩の刺青を入れていることを、この短い時間で見抜いていたのだ。

「……なんで、タトゥーのこと知ってるの」

「私、目ざといから。それに」

ナナは夏美のリュックを指差した。

「その重そうなりリュック、絶対ホテルに置いてきた方がいいよ。この店出た瞬間、ユースケの手下たちに路地裏に引きずり込まれるかもよ？」

ナナの忠告は本気だった。

この街は、川崎の泥水とも、横浜の冷たいネオンとも違う。もっと生々しく、血と金が直結している「島」のルールで動いている。

「ありがとう、ナナちゃん」

夏美はリュックを抱き抱え、席を立った。

「最後に一つだけ。もしトラオって男がこの店に来たら、私に連絡くれない？ 謝礼は弾むから」
「いいよ。でも、無理はしないでね」

ナナは連絡先を交換しながら、心配そうに夏美を見送った。

店を出ると、松山の夜はさらに深く、熱く煮詰まっていた。

夏美は壁沿いを歩きながら、考えを巡らせた。

トラオを探すには、ユースケの「ジオン」に近づくしかない。だが、この500万を持ったままでは危険すぎる。

（どこかに、この金を隠せる場所を……）

その時だった。

背後の暗がりから、複数の足音が近づいてくるのが聞こえた。

振り返る間もなく、強い力が夏美の腕を乱暴に掴み、路地と路地の間にある狭いビルの隙間へと引きずり込んだ。

「痛っ……！」

「声出すなよ、観音様」

低く、鉄錆のような匂いのする声。ユースケだった。

暗闇の中、ユースケの後ろには、ガタイのいい男が二人生きを潜めて立っている。

「リュック、見せてもらおうか。東京からの土産、たっぷり詰まってる？」

ユースケの冷たい手が、夏美の首筋に伸びてきた。

23

23

「リュック、見せてもらおうか。東京からの土産、たっぷり詰まってる？」

ユースケの冷たい手が、夏美の首筋に伸びてきた。

暗がりのビルの隙間は、潮風も届かない熱の溜まり場だった。

コンクリートの壁に背中を押し付けられ、夏美は呼吸を浅くした。左右から挟み込むように立つ二人の男の体温と汗の匂いが、嫌な膜のように肌にまとわりついてくる。

「ねえ、やめ——」

言い終わる前に、リュックのベルトを乱暴に引き剥がされた。

背中から重さが消える。タツヒコの札束の感触が、布越しに遠ざかっていく。

（ダメだ）

背中 of 観音菩薩が、一気に焼けるような熱を放った。

肉の下で、細い廊下の幻が伸びていく。あの川崎の木造アパート、お礼参りの夜、わざと大きな声を上げた時の、自分の背中の熱がフラッシュバックした。

―逃げるな。モノは守れ。

短い二つの文が、同時に突き刺さる。

逃げるな、は自分に向けられている。モノは守れ、は札束のことだ。タツヒコが遺した命の代償を、ここで奪われるわけにはいかない。

「ちょっと貸すだけだからさ」

ユースケが、リュックを片手で持ち上げた。その動きの軽さが、余計に腹立たしかった。

夏美は、迷わなかった。

体を捻り、壁に押し付けられていた肩を強引に抜くと、ユースケの手首に向かって膝蹴りを入れた。

「っ……！」

骨と骨がぶつかる乾いた音がした。ユースケの指からベルトが一瞬だけ緩む。

その隙に、夏美はリュックを奪い返し、反対側の壁際に走った。

壁の脇には、雨の日だけに流れ込む細い排水溝がある。コンクリートの蓋が半分欠けて、暗い穴が口を開けていた。

夏美はそこに、リュックを丸ごと押し込んだ。

布の擦れる音と、自分の心臓の音だけが頭に響く。

蓋の欠片を戻し、その上から足で土埃をかき集める。即席の隠し場所だ。完璧ではないが、ここから札束だけは一時的に離せた。

「てめ……」

背後で、ユースケが低く唸った。

次の瞬間、横から飛んできた拳が夏美の頬骨にめり込んだ。

視界が白く弾ける。壁に頭をぶつけ、尻もちをついた。

「逃げるな、って言ったのは、そういう意味じゃねえよ」

ユースケがゆっくりと近づいてくる。口調は静かだが、目の奥は明らかに怒りで細くなっていた。

「俺の目の前で隠し場所作るとか、度胸あるわ。嫌いじゃないけど」

夏美は鼻血を袖で拭った。

頭の中で観音菩薩がまだ熱を放っている。だが、さっきの声はもう聞こえない。ただ、皮膚の下に「ここで札束を抱えたまま連れて行かれるよりマシ」という、妙に現実的な冷静さだけが残っていた。

「……この街で、女のリュックを奪うのが男の仕事？」

夏美は、笑いながら言った。

声が震えているのを、必死に押さえ込む。

「金貨の匂い嗅ぐだけじゃ食えないから、強盗もセットでやるわけ？」

ユースケは肩をすくめた。

「人聞きの悪いこと言うなよ。これは保護だ。東京から流れてきた、背中に神様背負ってる女と、その女が持ってる危ない金。そのまま野放しにしとくと、島が汚れる」

「島が汚れる？」

「そう。俺らの地元がよ」

ユースケは指を鳴らした。

左右にいた二人の男が、夏美の両腕を後ろに捻り上げる。関節が悲鳴を上げる。

「痛っ……！」

「このへんで大声出したら、誰が先に来ると思う？」

ユースケが耳元に口を近づけた。

「警察か？それとも、さっき三線弾いてたオヤジか？ 違うよ。俺らだ。女の悲鳴には、島の鼻が真っ先に反応する」

言いながら、ユースケは路地の奥を顎で示した。そこには、灯りの消えた古いビルの非常口が見えている。

「少し、話そうか。ジオンの裏口は、涼しいぜ」

ユースケの笑いは、地面の奥から響いているように低かった。

夏美は足を踏ん張った。

「嫌だ」

「嫌でも来るよ」

ユースケは淡々と言った。

「背中の観音様に聞いてみなよ。ここで力尽くで逃げるのと、一回話し合いに付き合うのと、どっちが後がマシか」

背中が、熱を一段階落とした。

観音菩薩は沈黙している。だが、その沈黙が「今は動くな」と言っているように思えた。

（札束は隠した。今さらここで腕をもぎ取られても、500万ごと海に沈められるよりはマシだ）

夏美はぎりぎりのところで、足の力を抜いた。

「……わかった。行く」

ユースケは満足げに頷いた。

「賢い女だ。そういう女は、島の神様も嫌いじゃない」

夏美は、両脇の男に半ば抱えられる形で、暗いビルの階段を上っていった。

錆びた鉄扉が開き、湿った空気と、かすかな花札の音が漏れ出してくる。

ジオンの裏口―沖縄の闇と、島の「地元」のルールが凝縮された場所が、夏美を飲み込もうとしていた。

ジオンの裏口から入り、細い廊下を抜けた先にあるのは、ネオンが輝く表のフロアとはまったく別の、無機質で息苦しい空間だった。

壁紙は剥がれかけ、空調は切られている。天井からは古い蛍光灯の白い光が、部屋の隅の淀んだ空気を照らし出していた。

夏美はパイプ椅子に押し込まれ、両腕を背もたれごとガムテープで縛られた。腕が痺れ、口の中には血の味が微かに残っている。

ユースケと男たちは、「ちょっと涼んでな」とだけ言い残し、重い鉄扉の向こうへ消えた。時計はない。スマホも取り上げられた。

ただ、壁の向こう側から、一定のリズムで「パチン、パチン」という乾いた音が微かに聞こえてくる。

（花札だ）

ナナが言っていた言葉が蘇る。

ジオンの奥のVIPルームでは、花札賭博が行われている。

パチン、と札が場に切られるたびに、夏美の心臓が不規則に跳ねた。

川崎のデリヘルの待機所や、横浜のホテルで聞いていたどんな音とも違う。

この「パチン」という音は、まるで骨を直接叩かれているように響くのだ。

背中の観音菩薩が、じわりと熱を帯び始めた。

ただの熱ではない。皮膚の下を、微かな震えが走り抜けていく。

まるで、壁の向こうの花札の音に、背中に入れ墨が「共鳴」しているかのような音だった。

パチン。

（牡丹だ）

夏美は目を見開いた。

なぜか、壁の向こうで切られた札の絵柄が、頭の中に鮮明に浮かんた。

真っ赤な牡丹の花と、そこを舞う蝶。

パチン。

（芒（すすき）に月）

パチン。

（萩に猪）

札が切られるたびに、夏美の脳裏に花札の鮮やかな色彩がフラッシュバックする。

同時に、昼間に街角で聞いた「三線」の音が、耳の奥で遠く鳴り始めた。

三線の弦が弾かれる音と、花札が切られる音。

それが重なり合った瞬間、背中の観音菩薩が、これまでで最も強い――火傷しそうなほどの熱を放った。

―役（やく）を、揃えろ。

声が、頭蓋骨の内側に反響した。

夏美は息を呑んだ。

「仕事はちゃんとやれ」でも、「南に向かえ」でもない。

「役を揃えろ」？

部屋の隅、淀んだ空気が揺らいだように見えた。

蛍光灯の光がちらつき、その下で、薄ぼんやりとした幻が立ち上がる。

川崎の木造アパートの、あの薄暗い畳の部屋。

三味線を弾いている、死んだ母の背中。

そして、その後ろに立って、こちらを見ている男の影。

トラオだ。

首に太い傷のある、あのよれよれのスーツを着た男が、母の後ろで笑っている。

（オリオンの泡見てると、那覇の空気までいっしょに上がってくるってさ）

幻は、花札のパチンという音と共に、一瞬でかき消えた。

夏美は荒い息をついた。額からは冷や汗が流れ落ちている。

今の幻は何だ。

母の三味線と、トラオ。沖縄の三線と、花札。

すべてが、バラバラの断片のように見えて、実は一つの「役」として繋がっている。

観音菩薩は、そのことに気づけと言っているのだ。

パチン、とまた札の音が響く。

牡丹は母の三味線、萩は川崎のドブ、芒に月は泊港の防波堤。

猪は鉄也の倉庫、桜に盃はタツヒコの遺書。

札が揃うたびに、観音は「これは同じ役だ」と言いたげに熱を上げた。

―役を、揃えろ。

声がもう一度、はっきりと鳴る。

揃えるべき役は、花札の上だけじゃない。

夏美自身の「お礼参り」だ。

母へのお礼。

トラオへのお礼。

タツヒコへのお礼。

そして、自分自身へのお礼。

それを、この島のどこかで全部揃えてからじゃないと、自分は本当に終われない。

ガチャリ、と鉄扉の鍵が開く音がした。

夏美はハッとして顔を上げた。

「涼めたか？」

ユースケが、二人の手下を連れて戻ってきた。

その手には、夏美が路地の排水溝に隠したはずの、紫色のリュックが握られていた。

夏美の血の気が引く。

「島の鼻を甘く見るなよ」

ユースケはリュックを床に放り投げ、中身を床にぶちまけた。

茶封筒から、帯のついた一万円札の束がドサリとこぼれ落ちる。

「……五百万か」

ユースケは札束を見下ろし、低く笑った。

「東京の女が、こんな金持って沖縄（ここ）に何の用だ？　トラオって男が三千万持ってるって噂は聞いてたけど、お前、そのおこぼれか？」

夏美は唇を噛みしめた。

「違う。それは……私の金よ」

「だろうな。トラオは、金なんて一銭も持ってなかったからな」

夏美は顔を上げた。

「え？」

「トラオだよ」

ユースケはパイプ椅子を引き寄せ、夏美の目の前に座った。

「あいつ、この島に来て真っ先に俺のところへ来た。船の手配を頼むってな。でも、すってんでんだったぜ。金目当てなら、とっくに東京湾の底だろう」

トラオは三千万を持っていなかった。

鉄也のところで奪われたまま、本当に手ぶらで沖縄に逃げてきたのだ。

そして、ユースケはそれを知っている。

「で、どうする？」

ユースケは、落ちている札束を靴のつま先で軽く蹴った。

「この五百万は、島を汚した迷惑料として俺がもらう。その代わり、トラオの居場所を教えてやってもいい。あいつ、この島のどこで、どんな顔して生きてると思う？」

背中の観音菩薩が、再び熱く脈打った。

――役を、揃えろ。

その声は、今度はユースケに向かって言い放てと命じていた。

夏美は、縛られた腕の痛みに耐えながら、ユースケを真っ直ぐに睨みつけた。

「……五百万、全部あげるわよ」

「ほう？」

「その代わり、トラオの居場所と……あんたが持ってる『花札』、見せてよ」

ユースケの片眉がピクリと跳ね上がった。

「花札？」

「そう。壁の向こうでやってる、その賭博。……あんた、この五百万で、私と勝負する気はないの？」

「……五百万で勝負？」

ユースケはパイプ椅子に座ったまま、喉の奥で低く嗤った。

暗い部屋の空気が、さらに一段階重く沈み込む。

「東京の女が、この島で花札切ろうってか。ルールも知らねえくせに」

「ルールなんて、札が教えてくれる」

夏美は真っ直ぐにユースケを睨み返した。

背中の観音菩薩が、薄い皮膚の下でじりじりと熱を帯びたまま、微かに脈打っている。

ユースケはしばらく夏美の顔を値踏みするように見つめていたが、やがて短く舌打ちをし、手下に向かって顎をしゃくった。

乱暴にガムテープが切り裂かれる。痺れた両腕にドクンと血が巡り、夏美は顔をしかめた。

「いいぜ。その五百万、島への上納金として搾り取ってやるよ」

重い鉄扉が内側から開かれ、夏美はユースケの背中を追ってVIPルームへと足を踏み入れた。

むせ返るような紫煙と、古い畳の匂い。中央には緑色の羅紗が張られた低いテーブルが置かれている。

部屋には、ユースケの手下以外にも数人の男女がいた。

壁際のソファに深く腰掛け、グラスの水を弄っている四十代半ばの派手な女。

日焼けした肌に作業着姿のまま、無言でタバコをふかしている筋骨隆々の若い男。

「紹介してやるよ。メグミ姐に、アツシだ」

ユースケが羅紗のテーブルに座り、花札の山を引き寄せながら言った。

メグミと呼ばれた女が、面白そうに夏美を上から下まで舐め回す。

アツシは一瞥もくれず、ただ静かに煙を吐き出していた。

「この島じゃな、ヤンキーは大人になっても卒業しねえんだよ」

パチン、パチンと、ユースケの指先で黒い札が小気味よい音を立ててシャッフルされる。

「昼はアツシが現場でセメント練って、夜はメグミ姐の店で男たちが金を落とす。お前がさっき会ったナナの親父……地元の名士様がその土台を作って、俺がこの地下で裏のシノギを回す。それが島の『地元』ってものだ」

札が場に並べられていく。

「本土から流れてきたトラオって野郎は、その『役』をまったくわかってなかった」
トラオ、という名前に、夏美の肩がわずかに跳ねた。

「あいつ、地元のルールも知らねえくせに、いっちょ前に男の顔してシノギに手を出そうとしたんだ。結果はどうだ？ 島の連中に骨の髄までしゃぶられて、今はボロ雑巾だ」

「……」

「さあ、始めようか。ルールは『こいこい』だ」

ユースケの冷たい声とともに、勝負が始まった。

夏美は配られた手札を見下ろした。

花札のルールなど、昔トラオが遊んでいるのを横で眺めていた程度の知識しかない。

だが、札に指が触れた瞬間、背中の観音菩薩が火鉢を押し当てられたようにカッと熱を放った。

（牡丹。萩。菊）

頭の中で、引くべき札が鮮やかな色彩とともに浮かび上がる。

パチン。

夏美が札を場に切る。その音は、昼間に聞いた三線の音色や、川崎の部屋で聞いた母の三味線の音と完全に重なり合っていた。

「……チッ」

数順が過ぎた頃、ユースケの余裕の笑みが消え始めた。

夏美は自分でも恐ろしいほど冷静だった。

観音菩薩の熱が、ユースケの呼吸、視線、そして手札の気配までをすべて夏美の脳に直接伝達してくる。それはもはやギャンブルではなく、過去の記憶を一枚ずつテーブルに並べていくような感覚だった。

（月。桜。盃）

「お袋はオリオンビールが大好きだった。冷えてりゃ天国だって」

トラオの声が蘇る。百均のビニールクロス。ミニチュアの缶ビール。

「こいこい」

夏美の口から、氷のように冷たい声が漏れた。

見物していたメグミが、ほうと息を漏らす。

アツシの手から、タバコの灰がポトリと落ちた。

「ふざけんな……」

ユースケの額に脂汗が滲む。

最後の一巡。

夏美が場に叩きつけたのは『芒（すすき）に月』の札だった。

パチン、とひととき高い音がVIPルームに響き渡る。

「月見酒。……これで終わりよ」

圧倒的な点差だった。

テーブルの端に置かれた五百万のリュックは、誰にも触れられることなく、完全に夏美のものとして守り抜かれた。

深い沈黙が部屋を包み込んだ。

ユースケはしばらく場に並んだ札を睨みつけていたが、やがて乱暴に手札を放り投げ、深くソファに背中を預けた。

「……負けだ。お前の背中の中の神様、どうやら本物のバケモノらしいな」

「約束通り、トラオの居場所を教えて」

夏美がリュックを抱え直して立ち上がると、ユースケは忌々しそうに吐き捨てた。

「松山の外れに、取り壊し予定の廃ビルがある。地下のボイラー室だ。あいつはそこから一步も動かず、誰かに怯えるように息を潜めてる」

「……ありがとう」

夏美は五百万の札束を紫色のリュックに詰め込み、立ち上がった。

「急ぎな、観音様」

ユースケがジップで煙草に火をつけながら、背中越しに言った。

「本土のヤクザの犬が、もうこの島に入り込んでるって噂だ。山倉の連中も、三千万の行方を諦めちゃいねえ。会うなら、今夜が最後だぜ」

夏美は振り返らずに鉄扉を押し開けた。

松山の夜風は生温かく、ひどく湿っていた。

しかし、夏美の足取りにもう迷いはなかった。

すべての「役」を揃えるための最後の一枚。

あの不器用な嘘つきの元へ、夏美は夜の闇を切り裂くように駆け出した。

26

26

松山の外れに、その廃ビルがあった。

海から少し離れた斜面に、取り残されたように立っている四階建てのコンクリートの塊。

窓ガラスの三分の一は割れ、残りは潮風に曇りきっていた。

「……ここか……」

夏美は紫色のリュックのベルトを握り直し、錆びた非常階段をゆっくりとのぼっていった。

夜風が生ぬるく吹き込み、どこからともなく古い油と鉄の匂いが漂ってくる。

地下へ降りる階段は、薄いコンクリートの扉の裏に隠されていた。

暗闇に飲み込まれるような急な階段を、一歩ずつ下りていくと、空気が急速に重くなる。

暑さではなく、長い時間閉じ込められた湿気と恐怖の匂いだ。

「トラオ……」

その名を呼ぶと、返事の代わりに、かすかな物音がした。ボイラー室の錆びた鉄扉が、内側からほんの少し軋む。

「開けるよ」

夏美は、震えを押し殺してドアノブを掴んだ。

錆が指先にざらりとまとわりつく。

力を込めると、重い扉がゆっくりと軋みを上げて開いた。

そこは、かつて温水を循環させていた巨大なボイラーの残骸が、影となつてうずくまる部屋だった。

天井の蛍光灯は半分切れかけていて、うすぼんやりとした光の中に人影が一つだけ見える。

壁に背を預けて座り込み、片膝を立てた細い身体。

よれよれの作業着の下から覗く、首の太い傷跡。

足元には、片方だけ踵の潰れたスニーカー。

「……夏美？」

かすれた声が空気を震わせた。

顔は痩せこけ、目の下には深い影が落ちている。

それでも、その間の抜けた輪郭だけは、夏美の知っているトラオのものだった。

「生きてたんだね」

そう言って笑おうとしたが、声は少し震えた。

トラオは、ゆっくりと立ち上がろうとして、膝をついた。

右手には厚く包帯が巻かれている。鉄也の倉庫から逃げる時に噛み千切ったロープの傷が、まだ完全には塞がっていないのだろう。

鼻を刺すような薬品の匂いと、消毒液の残り香がした。

夏美は駆け寄り、肩を支えた。

その瞬間、腕の中に伝わる感触に、違和感が走る。

作業着の胸元がわずかに開いて、晒（さらし）が覗いた。

乱雑に巻かれた包帯のような布。その下に隠されているものは、男の胸板ではない。

長い逃亡の夜を誤魔化すために押し潰された、細い女の曲線だった。

「……あんた、そんな身体で」

思わず口をついて出た言葉に、トラオが目を伏せた。

「言ったら。何でも壊れてるって」

彼は、自嘲するように笑った。

「生まれた時から、男として扱われたことなんて一度もねえよ。父親にも、学校にも。番長やってた頃だって、実際はただの『鉄也の舎弟の女』だ。男の振りして、女もやって、どっちにもなれなかった」晒の端を、彼の左手が無意識に握りしめる。

そこには、長年自分を守るために嘘を重ねてきた人間の、癖のような痛みが滲んでいた。

夏美は、何も言えなかった。

背中 of 観音菩薩が、静かに熱を放つ。

川崎で初めてトラオに身体を預けた夜。

オリオン缶を並べて待っていた蒸し暑い部屋。

「世界一の海さ」と笑った顔。

どの記憶の中でも、トラオは「男」の服を着ていた。

だが、その裏側にこうして晒で軋む体が隠れていたのだ。

「バカだね」

夏美は、ようやく言葉を押し出した。

「そんな身体で、三千万の濡れ衣まで被って逃げて……何考えてんの」

トラオは肩をすくめた。

「お前の背中見てたら、わかったんだよ」

「背中？」

「そう。観音様だ」

トラオは、ゆっくりと夏美の背中を見た。

薄いTシャツ越しに透ける、あの鮮やかな紋紋。

「お前、自分の身体だって、人生だって、全部『仕事』に変えて生きてきたろ。川崎のドブも、横浜の夜も、全部背負って歩いてた。…なのに、親父のシノギまで背負わされるのは見てらんなかった」

「だから、あんたが代わりに背負ったってわけ？」

夏美の声には、怒りと呆れと、どうしようもない悲しみが混じっていた。

トラオは、短く息を吐いた。

「三千万なんて、最初から俺の手にはなかった。鉄也に丸抜かれされて、俺は倉庫で縛られてただけだ。そこから血まみれになって逃げて……ここにたどり着いた時には、もうすってんでんよ」

沈黙が落ちた。

ボイラー室の古い鉄が、夜風で微かにきしんでいる。

蛍光灯がチカチカと瞬き、室内の影を少しずつ揺らした。

夏美は、トラオの晒にそっと手を伸ばした。

布の上から、細い胸をなぞる。

「男でも女でもいいよ」

夏美は、ようやく笑った。

「あんたがどっちでも、私の人生の一番面倒くさいところと一緒に抱えてくれるなら、それで十分」
トラオの喉が、かすかに震える。

「……俺、女だぞ」

「知ってるよ」

「子供だってつくれねえ」

「私だって産めない」

二人の声が、ほとんど同時に重なった。

一瞬、静寂が訪れたあと、二人は同時に吹き出した。

笑いはお世辞にも綺麗なものではなく、長い逃亡と底辺生活の淀みが混ざり合った、少し歪な音だった。だがそれは、この地下の湿った空気の中で初めて生まれた「生」の音だった。

背中の観音菩薩が、皮膚の下でじわりと温かくなった。

「仕事はちゃんとやれ」と怒鳴る声は、もう聞こえない。

代わりに、「ここから先は、お前のやりたいようにやれ」と、静かに見守るような気配だけがあった。

27

27

「山倉の連中、本土からこっちに入ってるらしい」

ボイラー室の鉄の匂いの中で、夏美が言った。

トラオが顔をしかめる。

「だろうな。三千万の帳尻が合わない限り、あいつら諦めねえ」

「でも、タツヒコさんが最後に帳尻合わせてくれた。御大も山倉も、この島のルール壊せないくらいには動いてる。……だから、あんたはもう、誰かを背負って逃げなくていい」

夏美は紫色のリュックから、帯付きの札束を取り出した。

五百万。その重さは現実の引力より、もっと重い何かで手のひらに貼りついていた。

「これは、タツヒコさんが私に残した金の一部。……ひとまず、ここから出るための切符にはなる」

トラオは札束を見下ろし、首を横に振った。

「怖えんだよ」

「何が？」

「外に出るのがだ」

彼は壁にもたれかかり、天井を見上げた。

「鉄也の倉庫に縛られてる時、思った。ロープ噛み切って逃げても、金も船もねえ。山倉に見つかれば東京湾。どう転んでも死ぬなら、ここで黙って死ぬほうがマシなんじゃねえかって」

その言葉には、臆病さ以上のものが詰まっていた。

長年積もり積もった恐怖と、全て裏目に出てきた選択の記憶。「でも、噛み切ったじゃん」

夏美は静かに言う。

「そのロープ。血まみれになって逃げて、ここまで来た。死ぬのがマシだって思ってたなら、そのまま倉庫で待ってればよかったのに」

トラオは視線を落とす。

「お前が、川崎から出たって聞いたからだよ」

「……川崎から？」

「鉄也のところで縛られてる時に、お前の噂を聞いた。『夏美が川崎のアパート捨てて、横浜に流れたらしい』って。……お前はもう、俺のせいで殺される場所にはいねえんだって分かった瞬間、俺、自分が死ぬのが急に許せなくなった」

喉が震えている。

「全部背負って逃げたって、お前に誤解されたまま死ぬのが、一番嫌だった。最後に殴られて、『何で勝手に逃げたの』って言われないと、俺、前に進めないって思った」

夏美は、札束をぎゅっと握りしめた。

「じゃあ、その場面まで生き延びたんだから、あとは使い道を考えちゃえばいいじゃん」

「使い道？」

「あんた、断熱屋って知ってる？」

唐突な単語に、トラオが目を丸くした。

「なんだよそれ」

「アスベスト屋ってのもある。断熱材の入れ替えと、古いビルの石綿除去。防塵マスクつけて現場で粉まみれになる仕事。日当は高いけど、肺も削れる。……そういう本物の地獄なら、やる価値あると思ってた」

夏美の声は落ち着いていた。

川崎の倉庫街でのバイトの休憩時間に眺めていた求人サイトの文面が、頭の中に浮かんでいる。

「今までの地獄は、誰かのためだった。親父のシノギだったり、客の欲望だったり、男のプライドだったり。……断熱屋とアスベスト屋なら、自分たちのために地獄に行ける」

トラオは、札束を指先でなぞった。

「地獄へもう一回行くのか」

「そう。今度は、出入り自由の地獄」

夏美は笑った。

「肺を削って稼いだ金で、石垣島にパン屋を作る。母さんが山梨でやりたかったパン屋。海のない場所じゃ果たせなかった夢を、海だらけの島でやる」

トラオの口元が、わずかに緩む。

「馬鹿だな、お前」

「知ってる」

二人の間に、少しだけ温度が上がった空気が広がる。

「俺、女だぞ」

トラオがもう一度言う。

「断熱屋だろうがアスベスト屋だろうが、現場はぼ男しかいねえ。俺はまた、男のふりして働かなきゃいけねえ」

「ふりなんて、今さらじゃん」

夏美は肩をすくめた。

「粉塵まみれになって防塵マスクつけてたら、どっちだって同じだよ。肺の写真見て、男か女か当てる人間なんていない」

トラオの喉が、ごくりと鳴る。

「それにね」

夏美は、声を少しだけ潜めた。

「子供は産めないけど、育てることはできる。里親制度、沖縄にもあるでしょ。石垣島にもきつとある。…血の繋がりをより、傷の繋がりのほうが大事な家族だって、私たちなら分かる」

ボイラー室の鉄板が、風でかすかに鳴った。

背中の観音菩薩の熱が、静かに落ちていく。

「役を揃えろ」という声は消え、代わりに「これからは自分たちで役を作れ」という、曖昧で優しい気配だけが残る。

トラオは札束を握りしめ、壁から身体を離れた。

「…世界一の海、見せてやるよ」

小さな声だった。

「もう目の前にあるけど？」

「違うんだよ」

トラオは首を振る。

「海はさ、逃げるために眺めると地獄だけど、働き終わったあとに眺めると天国なんだってよ。断熱材まみれになって、アスベストで肺やられて、それでも生き残ったあとに見る石垣の海が、本当の『世界一』だ」

夏美は笑った。

「じゃあ、一緒に地獄行こ」

「おう」

二人はボイラー室の扉を押し開けた。

階段の上から、湿った夜風が吹き込む。

一段一段登る足取りはまだ重い。だが、もう「死ぬため」の階段ではなかった。

地獄へ向かうための階段。

その先にあるパン屋と、石垣島の海へ向かうための階段。

観音菩薩は黙ったまま、背中で二人を見送っていた。

廃ビルを出る頃には、松山のネオンはすっかり色を失い始めていた。

夜明け前の空は、鉛色と薄い青の中間のような色をしている。

「さっきの勝負、どうやって勝ったんだよ」

坂道を降りながら、トラオがぼそりと聞いた。

「花札？」

「猪鹿蝶と花見酒。……そんな器用な役、川崎の待機所でちょっと遊んだ程度の女が揃えられるもんじゃねえ」

夏美は短く息を吐き、足を止めた。

「札の音がね、三味線みたいに聞こえたんだよ」

「三味線？」

「うん。母さんの。川崎のアパートにずっと置いてあったやつ」

薄暗い畳の部屋。遺影の横に立てかけられた三味線。

弦に触れるのが怖くて、ずっとそこに「あるふり」をしていた年月。

「ジオンの奥で花札の音聞いたとき、最初はただのパチンって音にしか聞こえなかった。でも、観音様が熱くなるとき、その音の後ろに三味線がくっついてきた。母さんが山梨で弾いていた曲の、断片みたいなのが」

トラオは黙って聞いていた。

「で、その三味線の音の向こうに、あんたが見えてきた。オリオンビールの泡の音と、川崎のアパートの湿気と、那覇の潮の匂いが全部くっついて、猪鹿蝶と花見酒の絵と重なった」

「難しいな」

「簡単に言うとな」

夏美はふっと笑った。

「母さんの夢と、あんたの嘘と、私の背中の観音様が、全部一つの『役』だったって気づいたの」

猪鹿蝶。

力任せにぶつかってくる生き物と、ひらひら舞う蝶。

花見酒。

散っていく花の下で、誰かが酔って笑っている。

「母さんの三味線の音って、いつもどこかで『散る覚悟』みたいなのが混ざってた。山梨のパン屋の夢

も、結局は散っちゃった。でも、その散り方って、ただ不幸ってわけじゃなかった気がする」

夏美は観音菩薩の辺りを軽く叩いた。

「私たちもさ、散り方はもう決まってるのかもしれない。肺やられて、早死にするかもしれない。でも、その散り方を自分で選べるなら、それはただの不幸じゃなくて『役』でしょ」

トラオの肩が、ふっと揺れた。

「…詩人かよ、お前」

「断熱屋とアスベスト屋で粉まみれになりながら詩書く女、悪くないじゃん」

空が少しずつ白み始めた。

国道の向こう側には、泊港の防波堤が見える。

夏美は、かつてブルーシートの下の水死体を見た場所を一度だけ振り返った。

そこにはもう、何もない。ただ、朝焼けで銀色に光る波が、静かにテトラポッドを撫でているだけだった。

「一回死んだと思ったからこそ、今生きてる感じするな」

トラオがぼつりと言った。

「うん。私も一回、終わったと思ってたし」

背中の観音菩薩が、静かに脈打つ。

もう命令はしない。過去の映像も見せない。

ただ、「ここまでよく生き延びたな」と言うような、柔らかいぬもりだけを夏美の背筋に残していた。

29

29

「これ、捨てる」

コンビニの裏手。

泊港へ続く歩道の脇にある、青いゴミ箱の前で夏美は立ち止まった。

手には、画面にひびの入ったスマホ。

川崎のアパートの湿った天井も、横浜の関内のネオンも、タツヒコが送ってくれた短いメッセージも、全部この中に残っている。

「いいのか？」

トラオが問う。

夏美は頷いた。

「タツヒコさん、きっと『捨てろ』って言うと思うから」

指先で数回画面をタップし、保存されていた連絡先の一覧が一瞬だけ表示される。

川崎の古い番号。美晴の名前。タツヒコの名前。

御大の店の内線。

夏美は、深く息を吸い込み、そのままスマホをゴミ箱に放り込んだ。

「さよなら」

小さく呟く。

プラスチックが何かに当たる鈍い音がした。

トラオは夏美の肩に手を置いた。

「寂しくねえのか」

「寂しいよ。でもさ」

夏美は空を見上げた。

濃い鉛色だった雲が、少しずつ薄く、軽くなっていく。

「夜の連絡がないと落ち着かない人生に戻るほうが、もっと寂しい」

コンビニのトイレで顔を洗う。

鏡に映る自分の顔は、川崎で見たどの夜よりも、横浜で化粧を落としたどの朝よりも、素顔に近かった。

泊港の防波堤へ向かう途中、夏美は一度だけ海を見た。

昨夜水死体が上がったという場所。

警官の声。ブルーシート。血まみれの包帯。

全てを一度脳裏に通してから、その映像をそっと横に置く。

その横には、タツヒコの手紙の文字がある。

（トラオは生きている。松山にいる）

夏美は、トラオの横顔を見た。

晒の下の細い胸が、うっすらと呼吸に合わせて揺れている。

「これからはさ」

夏美は言った。

「お礼参りとか復讐とかじゃなくて、ただ『働く』ために生きる」

「ただ働くために、アスベストまみれになるのかよ」

「そういう働き方も、世の中にはあるんだよ」

二人は笑った。

その日からしばらく、夏美は沖縄本島の端々を歩き回り、断熱工事やアスベスト除去の仕事を斡旋する業者を片っ端から当たった。

現場監督の無愛想な男たち。建設会社の事務員。裏社会と微妙に繋がったブローカー。

五百万の存在を悟られないようにしながら、彼女は「日当の高い地獄」を慎重に選んでいく。

「肺が死ぬぞ」と何度も釘を刺された。

「女がやる仕事じゃねえ」と一笑に付された。

そのたびに夏美は、背中の観音菩薩を少しだけ撫でた。

（もう『女だから』って理由で仕事から締め出されるのは、夜の街だけで十分だ）
観音菩薩は何も言わない。

ただ、断熱材の繊維や石綿の粉塵を吸い込む肺の奥に、静かに寄り添っていた。

30

30

那覇から石垣島へ向かうフェリーの甲板で、二人は並んで座っていた。

強い風が晒をめぐり上げ、トラオの細い肩を撫でる。

「ほら、世界一の海」

トラオが顎で水平線を示した。

夏美は、オリオンビールの缶を開けて、一口だけ口に含む。

以前、川崎の古いアパートで飲んだ缶ビールは、湿った畳の匂いと壁の薄さを連れてきた。
今、フェリーの甲板で飲むオリオンの泡は、塩と太陽の匂いを連れてくる。

「前はさ、男のふりしてお前に偉そうに言ってたんだよ」

トラオが笑う。

『世界一の海さ。いつか夏美に見せてやりたいな』

「今はどう？」

「今は……一緒に見る」

トラオは、夏美の手を握った。

「男でも女でも、どっちでもいい。粉まみれになって、それでも生き残って、世界一の海を『日当のご褒美』として見てる自分のほうが、本物だと思う」

夏美は、トラオの晒を少しだけめくった。

細い胸の上に、自分の手を置く。

「お疲れさま、現場の女」

「そっこそ」

二人は笑い合った。

石垣島に着くと、現場の生活が始まった。

防塵マスクとゴーグル。厚手の手袋に、体を覆う防護服。

断熱材のグラスウールは肌をチクチクと刺し、アスベストの粉塵は目に見えない刃物のように肺の奥へ入り込んでいく。

「これで日当三万って、笑えるよな」

天井裏で汗だくになりながら、トラオが言う。

「川崎のデリヘルの、三人分の本番ナシの稼ぎだ」

「でも、こっちは誰も無理矢理脱がせないし、店長の名前を勝手に使う客もない」
「それな」

夏美は、防塵マスクの奥で笑った。

現場帰りの夜、二人は石垣の港の近くで、安い居酒屋のオリオンを飲んだ。

肺の中がガサつく感覚はある。それでも、そのガサつきは、誰かのために受けた傷ではなく、自分たちのために選んだ傷だった。

「私たちさ」

夏美がグラスを揺らす。

「たぶん長生きはしない。でも、そのぶん、早めにパン屋開けるよ」

「早めのパン屋って、なんだよ」

「夜の街で言えば、早上がりみたいなもん」

二人は笑った。

31

31

断熱屋とアスベスト屋としての生活は数年続いた。

五百万に現場の日当が少しずつ積み上がり、やがて石垣島の小さな空き店舗を買い取れるほどの蓄えになった。

「パン屋、ほんとにやるんだな」

トラオが、錆びたシャッターを見上げて言う。

「母さんのパン屋。山梨じゃなくて石垣だけど」

「山梨より、絶対こっちのが似合ってるよ」

シャッターを開けると、古いコンクリートの床と剥がれかけた壁紙が現れた。

二人は防塵マスクを外し、今度はペンキと木材の匂いにまみれながら店舗を改装していく。

厨房のスペースには、中古のオーブン。

客席には、小さなテーブルと椅子。

壁には、母の遺影のコピー写真と、沖縄の空と海の写真が並ぶ。

「ねえ」

ある夜、夏美はトラオに言った。

「里親制度って、石垣にもあるんだよね」

「あるらしいな」

「私たち、子供産めないじゃん」

夏美は、自分の腹を軽く叩いた。

「でもさ。産めないからって、誰かの親になっちゃいけないって決まりはないよね」

トラオは黙って聞いている。

「孤児院の子たちの話、業者からちらっと聞いたことある。暴力のある家から保護された子。親に捨てられた子。……そういう子に、パンとオリオンじゃなくて、パンと三線をくれる親には、私たち向いてる気がするんだ」

トラオの目が、少し柔らかくなった。

「自分らだって、まともな親もらったことねえのに」

「だからこそ、だよ」

夏美は笑う。

「孤独の底がどんな匂いするか知ってるからさ」

数ヶ月後。

二人は里親制度の窓口に向き、何度も面談を受けた。

過去の職歴と犯罪歴。裏社会の影。身体健康状態。

それらを包み隠さず話し、それでも「今はパン屋として生きている」と証明するのは簡単ではなかった。

それでも、ある日一通の通知が届いた。

「決まった……」

夏美は、封筒を握りしめた。

そこには、ひとりの少年の名前が記されていた。

親の顔を知らない、小さな男の子。石垣島の施設で育ってきた子。

初めて対面したとき、その子は怯えた目で二人を見上げていた。

でも、パンの焼ける匂いがある店の奥から出てきたトラオが、照れくさそうに笑いながら差し出した

小さな丸パンを受け取ると、少年の肩の力が少し抜けた。

「おいしい？」

夏美が訊くと、少年はこくりと頷いた。

血の繋がりはない。

父親もいない。

しかし、その夜から、石垣島の小さなパン屋には「親」と「子」が確かに生まれた。

32

32

店の名前は、「蒸す女（むすめ）」にした。

川崎の湿ったアスファルトの匂いと、石垣島の蒸し暑い海風の記憶を重ね合わせた名前だった。朝五時。

まだ薄暗い厨房で、夏美とトラオは粉を捏ねる。

断熱材と石綿ではなく、小麦粉と水とイースト菌。

生地が膨らむ香りは、肺を傷つけることなく、優しく鼻腔を満たしていく。

「母さん、これ好きだったろうな」

オーブンから焼きあがったパンを取り出しながら、夏美が呟く。

「山梨じゃ海はなかったけどさ」

店の窓の外には、石垣の青い海が広がっている。

その海は、もう逃げるための風景ではなく、「今日の仕事、おつかれ」と言ってくれる風景だった。

トラオは力仕事を担当し、生地の仕込みやオーブンの管理をしながら、合間に三線を弾いた。

母の三味線の記憶と、沖縄の三線の音が、パン屋の空気に溶けていく。

少年は、学校から帰ると店の手伝いをした。

トレイを運び、客に「いらっしゃいませ」と声をかける。

背中には何の刺青もない。でも、その足取りには、夏美とトラオの傷と選択が、静かに受け継がれていた。

「観音様、どうしてる？」

ある日、トラオが尋ねた。

「静かだよ」

夏美はエプロンの紐を少しだけ解いて、背中をさすった。

「もう何も言わない。ただ、焼き上がったパン見て、ちょっとだけ笑ってる気がする」

観音菩薩は、川崎のドブも、横浜のネオンも、那覇の潮も、松山の闇も見てきた。
今は、石垣島の白い粉と、三線の音と、少年の笑い声を見ている。

エピソード

エピソード

2057年の石垣島。

太陽も海も、あの日と何一つ変わらず青く輝いていた。

「蒸す女」の看板はすこし色褪せていたが、店内には相変わらずパンの焼ける匂いが満ちている。
「いらっしやいませ」

明るい声が、カウンター越しに響いた。

夏美とトラオが里子として迎えた少年——今は立派な大人になった彼が、パン屋を継いでいた。

ガラスケースには、丸パン、バゲット、島野菜を使った惣菜パン。その隣には、小さなオリオンビールのミニチュア缶が飾られている。

母とトラオの思い出の印だった。

カラン、とドアベルが鳴った。

杖をついた白髪の老女が、ゆっくりと店に入ってきた。

大きなサングラス。皺だらけの口元には、若い頃の鋭さがわずかに残っている。

「いらっしやいませ」

青年が微笑む。

老女——美晴は、ガラスケースの中のパンをじっと見つめた。

一つ一つの焼き色と形を確かめるように目を細める。

「……美味しそうなパンね」

かすれた声だった。

「母さんたちが残してくれたレシピです」

青年が誇らしげに言う。

美晴は、ゆっくりと頷いた。

かつて横浜のキャバクラの更衣室で、ブランド物のワンピースを着崩していた女。

新人の夏美を値踏みするように見ていた、冷たい瞳。

タツヒコの死を知った夜に、涙で腫らした目で遺書を手渡した、震える指。その全ての記憶が、焼きたてのパンの温度に溶けていく。

「二つ、もらえるかしら」

美晴が言う。

「…昔の友達に、お供えしたくてね」

青年は微笑み、紙袋にパンを二つ入れて手渡した。

美晴はそれを胸に抱き、店を出る。

外には、柔らかな海風。

どこからか、三線の音色が風に乗って聞こえてきた。

美晴は、海の見える高台へとゆっくり歩く。

そこには、小さな墓が二つ並んでいた。

ひとつには「今村夏美」。もうひとつには「下原トラオ」と刻まれている。

「…あんたたち、やっぱり馬鹿だったわ」

墓前にパンを供え、美晴は笑った。

「夜の街でくすぶってるほうが楽だったのに、肺削ってパン屋なんてやるんだから」

風が、白髪を揺らす。

遠くで三線の音が高まり、やがて静かに落ち着いた。

「でもさ」

美晴は小さく息を吐く。

「馬鹿な人生の終わり方としては、最高だわ」

彼女は、パン屋で買った丸パンを一つかじった。

その味は、川崎の蒸したアスファルトの匂いも、横浜の冷たいネオンも、松山の重い空気も含んでいた。そして何より、石垣島の優しい風と、世界一の海の青さを含んでいた。

観音菩薩は、石垣の空のどこかで、静かに笑っていた。

蒸す女

著 者 橋本 昂祈

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
